資料紹介

西田直二郎日記（2）

入山洋子 †

前稿に続き、西田直二郎（1886～1964）の日記を紹介する。一連の資料は京都大学大学文書館が所蔵し、「西田直二郎関係資料」として2020年３月に公開された。そのうち、前稿や本稿で紹介するような形態の日記は、第三高等学校に入学した1904年から晩年に至る41年分が確認できる（1904 ～ 1915、1917、1919、1923 ～ 1926、1928、1929、1934 ～ 1939、1941、1943、1944、1946～1952、1954、1957～1960年）[(1)]。記載量は年によってかなり差があるが、1946年以降に増える傾向が見られる。

前稿では、研究者として駆け出しの頃から京都帝国大学文科大学の講師、助教授へと、将来への不安を抱えながらも着実に地歩を築いていった時期の日記を取り上げた[(2)]。今回はそれに続き、記載量の多い1923（大正12）年、1926（大正15）年の２年分の日記を紹介する[(3)]。数えで38才、41才の壮年期である。日記本文に入る前に、いくつかのトピックスを取り上げて検討を加え、全体の解説に代えたい。

1923年の日記

１．在外研究を終えて

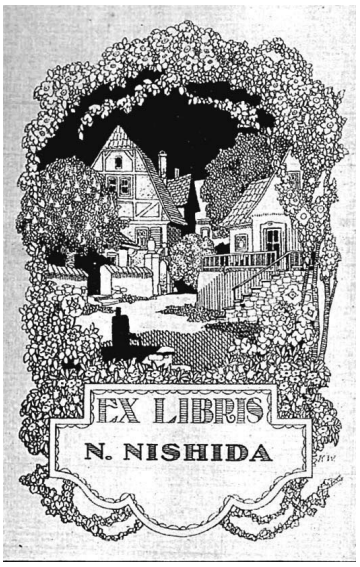
当時の助教授の常として、西田も在外研究を命じられ1920（大正９）年10月に渡欧した。この前月、従来の文部省留学生制度の法的根拠であった「文部省外国留学生規程」が廃止され、新たに勅令「文部省在外研究員規程」が施行されたので[(4)]、西田の渡欧は正確には「留学生」ではなく、ごく初期の「在外研究員」としてのものである。

２年間の在外研究を終え、1922（大正11）年12月に帰国、国史学第一講座に復帰した。1923年の日記１月24日条に、「文学部歓迎会」とあるのは、その帰国を祝ってのものだろう。第二講座担当の三浦周行も数ヶ月間の欧米出張から帰国したばかりであり、この日の歓迎会は三浦・西田両人が主賓だったと思われる[(5)]。

２月には、この後渡欧する、経済学部講師の黒正巌と法科出身で京都地裁判事の矢口家治を訪問している。17日に黒正あてに託された１ポンドとカント書肆の内実は不明だが、当時の１ポンドはおよそ10円弱、現在の感覚では数万円といったところだろう[(6)]。西田旧蔵の洋書には、「KANT-BUCHHANDLUNG／JOSEF SINGER／CHARLOTTENBURG」のラベルが添付されているものがあり[(7)]、これは、ベルリン西部シャルロッテンブルクのカント書店で購入したことを示している。やや想像を逞しくすれば、ベルリンに向かう黒正に、馴染みの書店での書籍購入を依頼したということであろうか。

２月27日に手にしたエカルドスの著書もベルリンで購入したもので、書店ラベルの他に、表紙見返しに西田の蔵書票が添付されている[(8)]。11月

† 同志社大学人文科学研究所　嘱託研究員（社外）



西田直二郎蔵書票（下記＊に添付）

23日のシュミーデル、シュペングラーおよびクレマンに関しては書名が記されていないが、やはり在外研究中に購入した書物で、それぞれOtto Schmiedel, *Die Deutschen in Japan*, Leipzig, 1920、Oswald Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*, 2Bd., München, 1922(*)、Friedrich Klemann, *Japan,wie es ist*, Leipzig, 1921であろう。三冊とも西田旧蔵洋書として京都大学大学院文学研究科図書館に保管されており、エカルドスの著書と同じ蔵書票が付されている。いずれも当時最新の研究書である。

ついでに言えば、1926（大正15）年度の西田の授業[9]の講読本の一つであるグーチの著書（George Peabody Gooch, *History and historians in the nineteenth century*, London, 1913）も、添付されたラベルからケンブリッジ滞在中に購入したものと判明する[10]。

２月20日条には「写真を鈴木君に頼む。ローテンブルグのもの也」とある。西田は渡欧中に史蹟を訪ね歩くことを楽しみとしたが、ドイツ南部の中世都市ローテンブルクにも行ったのであろう。そこで撮影した写真の焼き付けを依頼したものと思われる。「西洋に居たるときの如く、日曜は休養したきものなり」（1923年２月18日条[11]）などの記述とともに、かの地での暮らしぶりを伺うことができる。

３月には地元の大阪に帰省し、実兄菅原正隆が住職を務める天然寺と親交の深い浄土宗寺院が集まって歓迎会が催され（3.14）、「安着御祝として鯛二尾」を頂いた（3.16）。これらも、在外研究からの帰国を祝してのものであろう。

２．転居

帰国後ほどなくして、京都市北部の下鴨（現・左京区）に転居する。1918（大正７）年に市域に編入されたこの地域は、都市近郊農村から新興住宅地へと変貌を遂げつつあり、ここに居を構える知識人や芸術家も多く、いつしか「文化村」と呼ばれるようになっていた[12]。23年３月30日付で下鴨中川原町の山林および畑地、合計４畝24歩（144坪）を購入した（1923年補遺）。23年２月、３月の日記には、英文学者矢野禾積（峰人）・安子夫妻や中村直勝、大島徹水ら公私に亘る人脈を頼りに、土地・借家探しをする様子がうかがえる（2.18、2.19、2.21、3.1、3.19）。

矢野安子は直二郎の妻・道の４つ違いの実妹である[13]。矢野夫妻は西田夫妻の近く、南禅寺北ノ坊に暮らしていたが、22年中に下鴨泉川町に転居したばかりであった[14]。矢野家を追いかける形となった下鴨への転居は、姉妹にとっても心強い出来事であっただろう。矢野家とは、この後も気安い親戚付き合いを続けたことが戦後の日記から読み取れる[15]。

大島徹水は1904年開校の高等家政女学校（現・京都文教中学・高校）の実質的な運営者で、のちに校長になる人物である[16]。史学地理学同攷会主催の講座を四条寺町下る大雲院の同校で開いたり、史蹟調査や講演を依頼されたりなど、大島との交流は以前からあったが[17]、この時期西田が大島に厚い信頼を寄せていたことが伺える。

３．学務関係

学位請求論文の最終仕上げに勤しんでいた９月１日、関東大震災が起こる。京都も大いに揺れ、図書館にいた西田は目眩のように感じたという

(9.1)。数日後には、先輩格の厨川辰夫（白村）の罹災死という衝撃的なニュースが入り、京都でも流言蜚語が飛び交った（9.8)。

９月28日条に「ミュゼアム陳列案を造ること依頼さる」とメモがあるのは、この年増築された文学部陳列館に、新たに設けられることとなった国史陳列室[18]に関することであろうか。

授業に関してみると、この年、京都帝大では普通講義と特殊講義、新著批判を担当した（3.8)。後期は毎木曜日に臨時教員養成所と龍谷大学で講義を受け持っている（9.20、27、10.25、11.1、12.6、12.13)。臨時教員養成所は、既存の学校施設内に臨時に設けられた中等学校教員養成のための教育機関である。京都帝大には1923年から29年まで第七臨時教員養成所が設置され、初年度は国語漢文科のみが開講、倫理・教育・国語・漢文・英語・歴史が教授された[19]。このとき西田が講義をしたのは、この第七臨時教員養成所国語漢文科の歴史ということになろう。

龍谷大学では、まだ「仏教大学」時代の1919（大正８）年から授業を担当している。22年の大学昇格・改称後、少なくとも24年までは文学部の講座に「史学」はなく、「国学」講座の中で国史が講じられていた。その後26年度には「仏教史」講座を含み込む形で「史学」講座が設けられた[20]。日記９月25日条に「龍大国学の学制組織を考案すべきこと」とあり、この改編への西田の関与が示唆される。

11月１日には、宇野円空と羽渓了諦の訪問を受け、その後、宇野と共に「野々村先生の事件」を相談するべく坂口昂を訪れている。「野々村先生の事件」とは、本願寺の僧籍を有する龍谷大学教授、野々村直太郎の浄土教批判をめぐって巻き起こった教学論争である。宇野と羽渓はこの時共に龍谷大学に奉職し、特に宇野は問題解決の先頭に立っていた。この日どのような相談がなされたかは不明だが、野々村が他大学転任を理由に翌12月に依願退職し、その後立命館大学教授に就任して、一応の落着をみたことを考えると[21]、その処遇をめぐる相談だったのもしれない。

12月14日には、『史林』編纂会において同誌「昨年の史学地理学界」コーナーの充実を図ることを提案している。「昨年の史学地理学界」は同誌第二巻（1917年）から登場し、史学界と地理学界それぞれについて前年度に発表された研究業績を紹介する、現在の史学会『史学雑誌』における「回顧と展望」を彷彿させるものである。西田は初回から在外研究に出発するまでの４年間と、帰国後の24（大正13）年に、史学界全体に関わる概況や史学一般の部分を執筆している。この日の具体的な提案内容は分からないが、考古学や人類学なども対象にしようとの提案であろうか。同コーナーが「昨年の史学考古学地理学界」と改称されて考古学にも筆が及ぶようになるのは、考古学が文学部の史学科専攻科目となった1926（大正15）年度以降のことである。

ともあれ、この日の編纂会では西田の提案は先延ばしとなり、日記には苛立ちが書き付けられた(12.14)。

1926年の日記

23年秋に脱稿（1923.10.10）の学位論文「王朝時代の庶民階級」により、翌24年５月、文学博士の学位授与、９月には念願叶って教授に任命された[22]。共に国史学第一講座を分担していた喜田貞吉は東北帝国大学に移り[23]、これ以降、西田が同講座を率いていく。

１．学務関係

1926年の日記は、教授となって二度目の年度末

からはじまる。卒論査読や口頭試問、入学試験などに多忙な日々を送っている。この頃は学制改革の影響で学生数が激増した時期であり、史学科でも毎年の入学者は長らく一桁台だったのが、24年には35名、25年には58名、26年には63名と急増した[24]。さらに、龍谷大学の学生指導も加わり、多忙を極めたであろう。学生の論文を個別に受け取ったり、答案遅延の手紙が学生から送られてきたりするのは、当時の学生と教官の距離感を示しており興味深い（3.11、3.12、3.21、3.22）。３月23日には、国史専攻の伊藤八郎、後藤基次、岡本隆男らと深夜まで談に興じる等、学生と親しくつきあう様子がうかがえる。同席の「塚本」は、「京都市域の変遷と其の地理学的考察」[25]を卒論テーマとした地理学専攻の塚本常雄だと思われる。後述の乙訓郡史の調査で行動を共にした「塚本」も同一人物であろう。

就職の世話も大事な用務であった（4.13～15、9.4、9.5、11.8）。

26年度の授業は、水曜午前に演習、金曜午前に普通講義と史学概論、土曜午前に特殊講義と現代史学講読の計５つを担当し、他に、金曜午後は龍谷大学での講義を受け持った。水曜午後には史学科打合会や教授会が入ることがある。それらの合間に、原稿執筆や読書、調査、講義準備、というのが学期中のルーティンであった。

後年の京都帝大民俗学会に連なる「金曜会」は、西田宅で開かれた私的な懇談会であるが[26]、必ずしも金曜開催というわけではない（3.19金、10.13水、11.8月、12.11土）。

２月３日の条からは、いわゆる京都学連事件への文学部教授陣の対応がうかがえる。西田幾多郎・藤井健治郎をはじめ教授会全体が、社会科学研究会との関わりに及び腰である。数年後の滝川事件の際、文学部内は事なかれ主義が支配的であったが[27]、同様の感覚はこの時点ですでに見受けられる。

11月には、来校した文部大臣が学生の動向を問い質すなど（11.11）、大学に対する統制は着実に強化されつつあった。

この年夏に還暦・定年退官を迎える東洋史学の内藤虎次郎のために、後進たちは祝賀会開催・記念論文集出版を企画した[28]。学生時代から多大な感化を受けた同教授のために、西田も寄稿論文の準備に余念がない（3.24、3.26、4.1、4.6、4.7、4.9）。ところがある日、羽田亨から既に締め切ったとの情報を得、大いに驚いた（4.10）。結局５月の祝賀会では、東洋史関係者の論考のみを集めた『内藤博士還暦祝賀　支那学論叢』（羽田亨編、弘文堂書房、1926）が内藤に贈呈されることとなる[29]。

1906（明治39）年の文科大学（文学部）創設から20年の間に、講座の新設・増設が相次ぎ、教員・学生数も大幅に増加したことで、学部としての発展を見たが、反面、各講座の独自性が高まり、専門分化していったといえる。内藤記念論文のこの一件も、こうした傾向の中で捉えることができよう。

その後、西田や神田喜一郎（東洋学）らが中心となり、第二集を企画（9.18）、後に西田編『内藤博士頌寿記念　史学論叢』（弘文堂書房、1930）として東洋史以外の論考も収録して刊行された。

２．研究活動について

西田の主著『日本文化史序説』は、学位取得直後に京都帝大で行った夏季講演会での講義を骨子として、「夏期の来る毎に、補修を」加えたものであるが[30]、26年も少しずつ手を加えていることが分かる（6.16、6.28、7.6、9.6）。

それ以外の研究業績全般については、横田健一による詳細な著作目録がある[31]。しかし、公刊に至らなかったものは、当然ながら業績一覧には現

れない。乙訓郡史もその一つである。

京都府南部のこの地域で郡史（誌）編纂事業が始まるのは、1925年秋頃のことである。同郡町村長会長である渡辺政太郎（淀村村長）が中心となって進められるが、渡辺家はかつて西田が朝鮮通信使関係の史料を借り受けた旧家である[32]。それ以来、西田と渡辺家は史料を通じて親交を結んでおり、その縁により西田が、また西田の推薦によって井川定慶（国史1923卒）が、編纂に関わることとなった[33]。１月24日、７月18日条には、大原野村・向日町辺での調査の模様が、感性豊かに書きとめられている。乙訓郡史にはこの後も長く関わるが、遂に完成を見なかった[34]。

３月24日予記欄に書き付けられたドイツ語は、この日小島昌太郎経済学部教授と汐見三郎同助教授から聞いた貨幣の話に関することと思われる。「Hellwig」は特定できないが、「Knep」とあるのは、ドイツの経済学者クナップ（Georg Friedrich Knapp　1842～1926）、もう一人「誰レカノ Das heilige geld」とは、ラウム（Bernhard Laum 1884～1974）の神聖貨幣論のことであろう。11月８日には汐見からラウムの著書を借りて読んでいる。明治末から昭和初期にかけて、西欧の経済学者の影響を受け、国内でも貨幣の本質をめぐる議論が高まり、その交易上の機能のみならず、文化的に重要な要素を持つことが強調されるようになる。西田の恩師、内田銀蔵も早い段階からこの論に与し、貨幣の起源を祭礼の儀式に求める説を提示していた[35]。

西田がこの年発表した論文「平安朝に於ける貨幣の使用及流通について」[36]は、西田史学の中では一見異色に見えるが、貨幣をめぐる如上の議論に促されたものである（6.12）。内田やラウムの説を引き継いで、貨幣の宗教的意味合いや貯蔵財としての使用のされ方を指摘し、さらに銭司遺跡の発掘成果を取り入れた、極めて文化史学的な論考であった。１月の長府の鋳銭司遺蹟訪問（1.4）、２月の（おそらく京都府相楽郡加茂村[37]の）銭司発掘依頼（2.6）も、こうした関心に基づいてなされたと言えよう。

４月15日の条では、坂口昂文学部長から、帝国学士院の研究助成に採択されたとの朗報を聞く。このとき西田が申請したテーマは「江戸時代中期以後に於ける諸藩の学校及私塾の研究」、具体的には、近世諸藩の師弟教育の機関や庶民の教化に関する施策を調査し、学問普及の様相をあとづけ、合わせて「教化諸設備の遺物遺品」などの資料収集を行うという計画であり、26年度から５ヶ年継続、毎年600円の申請であった[38]。補助金の支給はひとまず一年分とのことであったが、新たな研究に気を引き締めている。

学士院の報告書によれば、26年度と、一年おいて28年度にも同じ研究題目で補助を得たとされる[39]。ところが、京都帝大総長の元に届いた学士院長名の通知は、西田を含まない９件の研究への補助給付を知らせている[40]。よって、実際の採用の有無とその経緯については、なお検討を要する。ここでは次の点を指摘するにとどめよう。

そもそも、学術研究費の助成事業は自然科学分野に比重をおいて整備されてきたという経緯があり、人文科学分野への助成が増えるのは1930年代以降である[41]。26年の段階では、学士院以外は啓明会など少数の団体が限定的に門戸を開いているにすぎない[42]。

京都帝大において、26年度に学士院に補助申請したのは全学で23件、西田以外はすべて理系学部の研究者である[43]。前後の年では、25年度と27～29年度の申請者はすべて理系学部に属し、人文系研究者は、ようやく30年度に法学部１名、31年度に法学部・経済学部各２名が申請し、そのうち採択されたのは１件のみである[44]。

このように、研究助成制度が理系と比べて圧倒的に不利な環境にあり、それと表裏の関係で人文

系からの申請も低調という状況で、一歩先んじて申請した西田は、進取の気性に富んだ研究者であったと言ってよい。また、この時期、近世の庶民教育の研究を深めようとしていたことは、西田文化史学を考える上で押さえておくべきであろう。

３．社会との距離感について

三浦周行のもとで発足して以来、十数年を経た読史会は、このころ、学生主体の動きも出てきているようだ。1925（大正14）年の大会後の晩餐の席上、三浦は、「（読史会の）幹事は子倅のやうに思ふてゐたのに、凡て独断にてやったのに驚いた。これでは今後は自分も例会にはいつも出ないでもよいやうになった、と嫌味交じりの挨拶」をした、と西田日記に書きとめられている[45]。とはいえ、まだ三浦の影響力は大きく、翌26年12月４日の大会は、三浦の発案により、明治維新60周年を意識して明治史をテーマとしたものであった。当日は、歴史愛好家の耳目を集め、立錐の余地もないほどの大盛況となった[46]。西田も登壇するが、こうした時流に乗るやり方は好きではなかったようだ（11.10、12.4）。

これは、８月20日条の「ことも博覧会」の感想とも通じるものがある。東京日日新聞社・大阪毎日新聞社主催の「皇孫御誕生記念京都こども博覧会」は、前年12月の皇太子（のちの昭和天皇）第一子（照宮成子）の誕生を祝して岡崎公園で開催された。公園内は３会場に分けられ、日記に記された「記念館」（第三会場の「照宮記念館」）には、皇族の出生時・幼児期の儀式に関する調度品や愛用品などが展示された。他の二つの会場は、近代的な「子ども」観と新しい生活スタイルを展示するものであったが、総じて商業的・娯楽的な要素の濃いものであった[47]。

また、博覧会開催にあたり、巨大キューピー像の設置や、自動車数十台の大行列、モダンなポスターなどによって、全国的に華やかに宣伝された。日記では、四国外行中にこの宣伝に接したと記すが、四国四県をはじめ西日本の各地方紙にも「絵入り広告」が掲載された[48]。こうした新聞社の商業主義や、内容の伴わないお祭り騒ぎに対して、実に手厳しい評価をしている。

「こども博覧会」だけでなく、十王経・仏名経の展示（3.12）や、恩師京都博物館での雛人形の展示（3.15）[49]、府立京都図書館での版画展覧会（3.22）[50]、美術商山中商会の金石文の展示（11.11）[51]など、多忙な合間を縫って大小の展覧会にしばしば足を運んだことにも注目しておこう。

史蹟調査は若い頃からの楽しみだったが、この時期も市内の史蹟情報に興味を持ち（12.13）、出張の際には当地の史蹟・遺跡を訪ね歩くのが常であった。

７月末の山陰出張では、大社町の誓願寺にある熊谷常斎（一徳）の墓を訪ねている（7.25）。熊谷は江戸中期の島根県簸川郡の儒学者で、今では忘れられた存在であるが、当時も口承と墓碑によるわずかな情報しか持たない人物であった[52]。墓への案内役の「廣瀬氏」は、刊行間もない『島根県誌』の編纂者の一人、廣瀬昊（同県師範学校教諭）と考えられる[53]。県誌は熊谷について、成立事情の不明な『大社志』の著者であると比定しており[54]、墓前での話もさぞ盛り上がったであろう。同じ日に訪問した手銭家は、松江藩の御用商を務めた近世初期から続く旧家で、文芸活動の盛んな家系である[55]。

山陰から帰京し、息つく間もなく８月には広島、引き続き愛媛へ出向いた。５、６日は尾道史談会主催の講演会に、８～10日は愛媛県教育会・伊予史談会共催の「歴史地理講習会」に、それぞれ史学地理学同攷会の委員数名が出講したものである[56]。いずれも、西田ら京都からの一行は手厚い歓待を受けた。愛媛では史談会の案内で松山城や東雲神

社を訪問したほか、旧松山藩校明教館に足を伸ばし、同地心学の祖・田中一如の六行舎[57]や、松山の七曲街道、鹿島の風光などに心躍らせている（8.9～8.11）。

小括

以上、西田直二郎40歳前後の日記をめぐり、いくつかの事柄に焦点をあてて検討した。推測の域を出ないものも多いが、西田直二郎という学者個人に関しては、おおよそ、次のようなことが言えるだろう。

まず、20代の日記[58]に見えた煩悶や自戒の感情は、すっかり影を潜めていることである。二年間の在外研究、学位授与、ついで宿願の教授就任と、順風満帆に研究者としての地位を確立し、他大学を含め学内の重要事案にコミットする場面も増え、京都史学界における影響力・存在感を高めていったこの時期は、私生活でも永住の地を定め、自信と希望に満ち溢れていたといえよう。三浦周行をはじめ文学部陣営への批判的な見解も、その現れといえまいか。

次に、この時期に限らないが、多くの人名が記されるのが西田日記の特徴である。大学関係者は勿論のこと、市井の学識者、教育者など、幅広い交友関係を窺い知るのに十分である。展覧会にもしばしば足を運び、史蹟・遺跡への関心はますます旺盛である。この時期の西田は、権威に拘らない柔軟さと軽やかなフットワークを持っていたことを、ひとまずは指摘しておこう。

※本稿は、2016～2018年度同志社大学人文科学研究所第10研究および、2019～2021年度同第９研究「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究―現場と公共性―」の成果の一部である。

[註]

（1）1904～1909年は１冊に記載され、1909年は別に１冊単独で存在する。1944年は和綴じ冊子４冊に、それ以外は博文館や積善館の日記帳１冊に１年分が記される。他に旅行日記が３冊ある。

（2）入山「西田直二郎日記（1）」（『京都大学大学文書館研究紀要』18号、2020年）。ここでは、京都大学大学文書館所蔵「西田直二郎関係資料」識別番号：西田Ⅱ-６、Ⅱ-７、Ⅱ-８、Ⅱ-11、Ⅱ-17を紹介した。以後、同資料については識別番号「Ⅱ-（算用数字）」のみを記す。

（3）「大正十二年　当用日記」（Ⅱ-19）、「紀元二五八六年　当用日記」（Ⅱ-24）。

（4）勅令第393号（『官報』1920年９月15日）。

（5）２月３日には読史会でも両人の「帰朝歓迎会」を開いた（「彙報」（『史林』８-２、1923年４月））。

（6）当時、１ポンド＝20シリング＝240ペンス。この月の為替相場は１円あたり平均24.78ペンス（大蔵省理財局『金融事項参考書. 大正13年調』）。よって１ポンド＝9.685円の計算になる。友人実弟への香奠が１円（註（2）1919.9.10条）、退官教授送別会会費が１円20銭（同上1913.10.14条）、1923年の小学校教員初任給が40～55円（森永卓郎監修『物価の文化史事典』展望社2008年、398頁）などから類推した。

（7）例えば、Theodor L. Haering , *Die Struktur der Weltgeschichte*, Tübingen, 1921（京都大学大学院文学研究科図書館特殊文庫「西田直二郎旧蔵洋書」）。

（8）Eccardus, *Geschichte des niederen Volkes in Deutschland*, Berlin, 1907（同前「西田直二郎旧蔵洋書」）。

（9）「京都帝国大学文学部史学科　本学年講義題目」（『史林』11-３、1926年７月）。

(10) 京都大学大学院文学研究科図書館特殊文庫「西田直二郎旧蔵洋書」。

(11) 以下、日記からの引用は引用文の後に「(1923.2.28)」、もしくは年を省略して「(2.28)」のように記す。

(12) 下鴨の文化を子どもたちに伝える会『親と子の下鴨風土記』（第４版改訂）1993年、41頁。

(13) 石関敬三・紅野敏郎編『大西祝・幾子書簡集』教文館、1993年、646頁。松村緑「大西操山雑記

―縁故者としての見分―」（東京女子大学日本文学研究会『日本文学』14号、1960年３月）。

(14)「矢野禾積略年譜」（『矢野禾積博士還暦記念論文集　近代文芸の研究』1956年）。

(15) 例えば、「当用日記　昭和二十五年」（Ⅱ-74）には、安子や夫妻の長女玲子に自宅の留守番を頼んだり、禾積に直二郎の別宅を貸したりする様子が記されている。

(16) 学校法人京都文教学園『京都文教学園の百年』2004年。同校は1924年、高等女学校に昇格して家政高等女学校と改称、34年には岡崎に移転した。

(17) 註（２）1919.1.26、3.1、3.29、7.1条。西田は戦後、同校の学園歌を作詞、「自ら投稿」している（前掲『京都文教学園の百年』40～41頁）。

(18) 京都大学文学部『京都大学文学部五十年史』1956年、278頁。

(19) 杉森知也「臨時教員養成所の設立と機能について」（日本大学教育学会紀要『教育学雑誌』31号、1997年３月）。

(20) 龍谷大学『龍谷大学三百五十年史』通史編　上巻、2000年、634～639頁。

(21) 註（20）639～649頁。教団側は８月に野々村の僧籍を剥奪し、更に教授罷免を求めたが、学問の自由と自治を主張する大学側が反発して対立していた。

(22) 残念ながら、この年の日記（「大正十三年　当用日記」（Ⅱ-20））に就任に際しての感慨などは記されていない。

(23) 1924年９月京都帝大教授を退任、以後は講師として出講する。

(24) 註（18）巻尾付表。

(25)「大正15年度卒業論文題目」（『史林』11-３　1926年７月）。

(26) 柴田実「日本文化史論」（『日本民俗文化体系10　西田直二郎・西村真次』講談社、1978年、45～46頁）。蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について」（京都民俗学談話会『京都民俗』19号、2001年）。斉藤利彦「西田直二郎とヨーロッパ留学」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』５号、2008年）。

(27) 松尾尊兊『滝川事件』岩波現代文庫2005年。193～195頁。註（18）307～308頁。

(28)『芸文』16-11　1925年11月、同17-６　1926年６月。

(29)『芸文』17-６　1926年６月。

(30) 西田直二郎『日本文化史序説』（改造社、1932年）「はしがき」３頁。

(31)「西田直二郎先生著作目録」（古代学協会編『西田先生頌寿記念　日本古代史論叢』吉川弘文館、1960年）。

(32) 註（２）解説参照。

(33) 向日市文化資料館『特別展示図録　乙訓郡誌の編纂とその時代』2017年。玉城玲子「未刊「乙訓郡誌」編纂の体制と経過」（2017年10月同志社大学人文科学研究所第10研究班報告）。井川定慶『我が歴史』井川博士喜寿記念会出版部、1974年、338頁。

(34) 註（33）向日市文化資料館『特別展示図録』、同玉城2017年報告。近年、この時の編纂途中の原稿が『未刊「乙訓郡誌」稿』（地理篇、文化篇、歴史篇、史料篇。向日市文化資料館、2017年）として書籍化され、現在、三市一町に分かれた同地域の通覧に貴重なものとなっている。ただし、同書「刊行にあたって」（地理篇）に言うように、あくまで未完成のものであることに留意する必要がある。例えば、日記７月18日条において西田は勝龍寺城跡の説明標示に疑問を呈しているが、同書の該当箇所（文化篇、443頁）に、その意向は反映されていない。

(35) 内田「貨幣ノ起源」（『国家学会雑誌』16（180）1902年２月（『内田銀蔵遺稿全集　第２輯　日本経済史の研究』（同文館、1924年）所収））。二階堂達郎「貨幣生成論の二つの型」（『思想』748号1986年10月）参照。

(36) 改造社『社会科学』1926年７月（西田直二郎『日本文化史論考』（吉川弘文館、1963年）所収）。

(37) 京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』第４冊（1923年）、同 第７冊（1926年）に同村銭司遺跡の報告がある（いずれも梅原末治執筆）。

(38)「帝国学士院学術研究費補助関係書類　自大正14至昭和６年」（京都大学大学文書館所蔵、識別

番号01A00012）。

(39) 帝国学士院『研究費補助事項調　自大正二年至昭和十三年』1939年。

(40) 註（38）所収「甲第28号」（大正15年４月19日付）。内訳は、医学部４件、工学部１件、理学部１件、農学部３件。

(41) 駒込武・奈須恵子「人文科学の研究動員」（駒込武・川村肇・奈須恵子編『戦時下学問の統制と動員　日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会、2011年）228頁。

(42) 吉田熊次・本田弘人『文科諸学の研究及奨励に関する調査報告』1940年、13～14頁（同報告書のことは、註（41）駒込・奈須論文に詳しい）。

(43) 註（38）。

(44) 同上。30年は牧健二、31年は牧と田村徳治、本庄栄治郎、小島昌太郎。このうち小島のみ採択された。ただし、文部省の精神科学研究奨励金制度が創設された1929年度以降、人文系研究者は、学士院より助成を得やすいそちらに申請するケースが増えたものと思われる。

(45)「大正十四年　当用日記」（Ⅱ-22）12月５日条。

(46)「彙報」（『史林』12-１　1927年１月）。

(47) 川口仁志「「皇孫御誕生記念こども博覧会」についての考察」（『松山大学論集』17-６、2006年２月）。木村涼子「子ども／家庭／婦人を冠する博覧会の歩み－日常生活及び家族の近代化と国家の発展のポリティクス」（『復刻版　近代日本博覧会資料集成《子ども・家庭・婦人博覧会》』別冊解説、国書刊行会、2018年）。同　第二巻、2018年。

(48) 註（47）『復刻版　近代日本博覧会資料集成』第二巻、49、50、72～93頁。

(49)「雛及雛調度類展覧会」、会期３月１～15日（京都国立博物館『京都国立博物館百年史』1997年）。

(50) 江戸時代初期の版画と絵入版本・古版地図を展示、会期３月21・22日（『京都日出新聞』1926年３月21日付夕刊）。

(51)「東西古陶金石展観」大阪美術倶楽部にて開催、会期11月10～12日（山中商会編『東西古陶金石展観』1926年）。

(52) 簸川郡私立教育会編『簸川郡偉人篤行者伝』1919年。島根県教育会『島根県誌』1979年（1923年の覆刻）。手銭白三郎「儒者熊谷一徳の墓」（『大社の史話』89号、1992年２月）。

(53) 註（52）『島根県誌』序文。

(54) 平井直房「大社志の成立」（『神道宗教』101号1980年12月）によれば、熊谷が関与したのは『大社志』ではなく、その種本である『出雲大社記』（1712年）である可能性が高い。

(55) 田中則雄「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」（国文学研究資料館調査収集事業部『調査研究報告』33、2012年）。

(56) 史学地理学同攷会『歴史と地理』18-３、1926年９月、同18-４、1926年10月。

(57) 愛媛県『愛媛県史　学問・宗教』1985.3年（第一編第三章第二節「松山の心学」）（愛媛県生涯学習センター　データベース『えひめの記憶』http://manabi-ehime.sakura.ne.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/54/view/7235 参照2021年２月17日）。

(58) 註（２）。

凡例

翻刻の基準は下記の通り。

・当該年の日記帳２冊の全翻刻である。

・日記帳に印字された「予記」欄および本文罫線から意図的にはみ出した記載については【　】で括った。ただし、本文の続きを予記欄や欄外に記す場合は、断りなくそのまま本文に続けて入力した。「発信」「受信」欄の記載はそれぞれ**【発信　】【受信　】**とした。

・〔　〕内は翻刻者による注記である。

・人物については、学会報告や肩書き等から判明した人名、および交友関係・前後の文脈から推測しうる人名を、原則として初出箇所に傍注した。京都帝国大学に在学中の人物や直近の卒業生については、必要に応じて学科または専攻学科、入学・卒業年などを補足した。数字は西暦1900年代の下二桁を記した。一部の人名はアルファベットに置き換え、〔A〕～〔D〕と記した。

・旧字・異体字は正字に直した。固有名詞についてはこの限りでない。
・適宜句読点を付け改行を詰めた。
・判読不明の文字は字数分を□で表した。
・原文中の欠字は該当個所に〈　　〉を記載し、推測できる文字がある場合はその中に記した。

大正十二年当用日記（東京博文館発行）

一月二十三日　火曜
【五時学生集会場、三高文学士会】

一月二十四日　水曜
【文学部歓迎会、東洋亭】

一月二十五日　木曜
【前九時黒谷方丈、講演会】

二月十六日　金曜
夕方黒正〔巌〕さんところに行く。家口〔矢口家治・京都地裁判事〕さんにも一寸よる。

二月十七日　土曜
朝、論文。進捗少なし。
午後黒正さん出発見送りに行く。一時出発なりしか少し遅れて折角のことに停車場にてお目にかゝれず。駅にて三島丸事ム長井村氏に逢ふ。明日出帆の鹿島丸の乗組となりたりと話する。鹿島丸は黒正・家〔矢〕口両氏の乗る船なり。家口氏来らる。黒正さんに一〔ポンド〕磅及カント書肆のことヲ依頼をことづける。
史学研究会例会。植村〔清之助〕・三浦〔周行〕二氏。民族大移動に就いて。三浦先生は欧米史界の管見。二時間余。夜岩橋〔小弥太〕君を訪問、十一時まて談す。

二月十八日　日曜
【天気麗かにして春の如くに思はる。夜少し寒むし】
朝、白河に行き、勝本さんの下の家見る。不在中長谷川福平さん来らる。午後矢野〔禾積・安子夫妻〕に行く。熊沢さんところを訪ひ案内によりて加茂の土地見る。後矢野より道と同道にて見に行き、家にかへる。夜大島〔徹水〕さんに相談に行く。
けふは論文のこと休む。此間より勉強したるを以て一日休養。西洋に居たるときの如く、日曜は休養したきものなり。

二月十九日　月曜　　冷気　夜雨となる
【本日黒正さんより家代ること言ひ来らる】
朝八時前起。道子、大島さんところまで行き加茂地面のこと相談をすると云ふ。
論文考按。日本書紀読ム。大化改新以後。午後第一高女に行く。校長大石〔和太郎〕さんに挨拶。神職会に行き鳥羽重節〔松尾神社（伏見区）宮司〕さんに逢ひに行く、不在。名刺を学生にことづける。鳥羽さんより手□〔紙〕。
道と中加茂方面に行き土地柄・家など見る。夕刻かへる。南禅寺前田さんによる。門口よりかへる。高女入学のこと返事する。
夜論文。書紀読み了る。十一時臥。

二月二十日　火曜
朝、論文。雨大に降る。午後大学。写真を鈴木君に頼む。ローテンブルグのもの也。経済論叢持ちかへる。二冊。矢野仁一さんところに行く。史学研究会のことの講演の御断り也。かへる。牧健二君已ニ来宅。夜遅くまて談す。

二月二十一日　水曜
午後三時家政女学校に大島師を訪ひ、土地購入のことにつき相談。検見分することを頼む。夕けふ行く日也。四時過ぎ下加茂に行き夕方まで行く。大島さんは反対の方也。
夜又道と共に人見に行く。十時前頃熊沢氏宅に行く。已に戸を閉しあり。

二月二十二日　木曜

朝、小川白楊氏弟来る。黒正君の家の後のことに□□〔つきヵ〕来る。家を借さぬことにつき種々言ひ訳する~~が、当方にては別に~~

午後二時半下鴨人見氏に行く、不在。人見氏、私〔この〕宅に来る。入れ違ひとなりしなり。道銀行に遣り四百円とり出す。予不在中、道早くかへり人見氏に会ひ、明日とりきめることにする。

予は矢野により五時より雨ふる。傘かりて人見氏に行く。なほ不在也。かへる。午後七時田中彦三郎氏来り待ちてあり。黒正君夫人、歴史地理二月号借りに来てゐられたり。大にさがす。本庄〔栄治郎〕君か急ニ入用とのことにて是非欲しいと言はれたり。田中氏を待たせ大にさがす。田中氏かへる。

二月二十三日　金曜

朝七時起、八時下加茂ニ行く。地所見分のため也。宮崎総三郎氏と人見儀之助との立合の上にて地を見る。熊沢氏の宅に行き十二時過かへる。午後二時頃田中彦三郎氏来。家のこと云ひ来られたり。八□伊の向ひの家明きたりと云ふ。見に行く。思はしからず。三時半、けふの文学部学友会の歓迎会のことにつき腹案をする。出来ず。四時半家を出で集会所に行く。八時閉会。太宰施門氏に初めて逢ふ。帰途小島祐馬君と寺町まで書物や見に行く。

二月二十四日　土曜

朝、天気よし。人見来る。四百円渡す。仮契約書持ち来る。中食出す。酒よく飲む。夕食後黒正夫人来、又吉邑喜久三郎君来、西洋の談をする。十時迄。

二月二十五日　日曜

朝、小川より使来る。家明けて呉れと云ふ。大島徹水さん来らる。談話。中食して行かる。家のこと言はる。四時過より沐浴。夜岡崎〔文夫〕君来らる。晩〔おそ〕くまで談話。

けふ歴史と地理編纂会ある日なり。来客引きつゞき、行くを得ず。

二月二十六日　月曜

【伯林　山田氏来状】

朝、論文。道、会に行く。

午後大阪にかへる。四時半家を出で大阪夕方。

寒さ酷し風強し。談話する。

二月二十七日　火曜

【晴。極めて寒し】

大阪。朝湯。其後銀行に行き千円引き出す。午後小川勇様へ行く。ちせい様に会ふ。カンチャン以下二人ノ弟も居たり。庭よりかへる。草餅を買ひてかへる。五時家を出でゝ京都にかへる。道々論文のこと考へる。家にては大学より送状のこと。論文近世出版法論（中村喜代三〔国史23卒〕）受取る。十二時まで読書。エカルドスの独逸下層民史〔Eccardus, *Geschichte des niederen Volkes in Deutschland*, Berlin, 1907〕読む。

二月二十八日　水曜

【寒気強し】

朝、論文。午後大学に行く。シルバンレビー〔Sylvain Lévi〕講演。仏教の文化の題。太宰施門氏通訳。けふは水曜会なし。三浦先生と同伴して帰る。夜寒さ甚し。寐床に入りて論文かく。机にては足冷えて頭集中せず。十二時臥。寒さ酷し。

三月一日　木曜

【雪ふる。寒し。天気晴れ】

朝、論文のこと。一時過迄。

道を銀行にやる。住友、鴻池。本日払込べき宮城県電気事業公債の資金調達の為也。住友三百、鴻五百五十、郵便局五十。午後斎藤儀〔証券業者〕に行く。千九百四十円払込。

　番号、丁第〇九九番ほ号

丁第壱〇〇番 〃
〃壱〇壱番 〃
壱〇弐番

大島さんところによる。売家の地図面返却。下加茂に行く。文化村の家貸す家を探しに行く。佐藤広治氏の家の前をとほる。道、矢野による。予、中村直勝君のところに行く。貸家を見る。郵便局の隣也。夕方かへる。夜、論文。

三月二日　金曜

【向坂、坂口、世良氏〔寿男〕ノ件】

朝、住友銀行に行く。英国のCheque替へる。三千九百九十八円四十三銭を得。二志〇７／８〔2シリング0.875ペンス〕也。

午後、田中彦三郎氏来る。為替送附のこと相談に来る。

夕方、岩井君訪問。

【山田、字大阪、長谷川、国道社、鳥羽】

三月三日　土曜

伊勢参詣の日なりしが雨の為めやめる。後晴れたり。晏起。小包したり。岩井君。牧野君葉書。中尾保さん葉書。読書。

三月四日　日曜

【晴】

道、成瀬〔仁蔵〕校長さん〔日本女子大学創設者、1919.３.４没〕の追悼会に行く。午後、散歩旁々下鴨に行き人見に行く。夜。

三月五日　月曜

【晴】

朝。

昼、食後学校に行き世良君に逢ふ。田中氏より依頼の件たのむ。四時頃かへる。田中彦三郎氏及田中楢一君来る。

夜、向坂君ところに行く。不在。鈴木おばさんに会ふ。

三月六日　火曜

朝、裁判所に閲覧ノ為メ行ク。十時頃かへる。道は音楽会（久野久子嬢の）ありとて出て行きたり。予は帰宅後読書。夕方、人見に行く。帰宅後読書。この日、人見来たりたり〔ママ〕と云ふ。道逢ふ。岸興詳君も来た。

三月七日　水曜

【晴】

朝、読書。午後、水曜会のことにて学校に行く。水曜会なし。喜田〔貞吉〕先生及川島〔元次郎〕君〔1922.12.10没〕のこと協議会あり。三時頃行きたるに已に二時頃より始めたりとて、終りたるところ也。

読書して文書読む。向坂君ところに行く。

三月八日　木曜

【晴。雨あり。少し寒。道悪し】

朝、読書。中食のとき三浦先生より来状。来学年講義のこと打合すべき為め登校されたしとのこと。小使袖岡来る。三時まで打合。喜田先生もありて講義のこと。

三浦	国史（中世）	２、（普）
	貞永式目追加の研究	１（特〔ママ〕
	演習	２
喜田	国史（古代）	２
	歴史地理	２
	解題及講読	１
予	国史（近世）	１（普）
	古代文化の発達	２（特）
	最近国史著作批判	（１）

夜、論文読む。

三月九日　金曜

【雨。後はれる】

朝。

人見来ることを待つ。読書。
午後、読書。勉強したる為め四時少し頭重くなるゆへ散歩。六時頃食事。道、音楽会の勘定のため上田〔ママ〕？さんところに行く。宮田、中野さんに会ひたりと云ふ。
六時半、岸興詳君のところに行く。帰宅九時半、新聞読む。

三月十日　土曜
【晴。春の如し】
朝、手紙人見より来る。地主森下なることを言ひ来る。測地十一日すべしと云ふ。散髪、湯、帰れば中外日報社ノ人待ちてあり。談話二時まで。少食。読書続紀。
四時十五分同意坂口〔昂〕先生宅に行く。写真とる。田中氏より電話来る。十時まで坂口先生宅、一〔ママ〕。
にもつ夕刻来る。不在也。

三月十一日　日曜
【雨ふる】
朝、けふ測量に行くべきのところ雨也。えはがき整理。午後、牧野君来。田中彦三郎さん来。

三月十二日　月曜
【天気よろし】
土地測量のことにつき下鴨に行く。矢野による。午後また測量地に行く。帰途矢野による。夜、論文。

三月十三日　火曜
【朝晴れ後寒冷。雪あり】
朝おそく起き、学校による。論文かへす。
午後、測量に行く。さき坂電話かける。
夜論。
【熊沢さん来。中村喜代三】

三月十四日　水曜
【天気よろし。暖】
朝、大阪に行く。途、宇野〔円空〕君に会ふ。一時過大阪着。五時半より歓迎会あり。
竹林、蓮生、専念、誓福、慶伝、無量、源光、安楽、仏心、石田、香川順孝

三月十五日　木曜
朝起き、藤田銀行、日本銀行、農工銀行に行く。帰途安楽寺以下、八寺に行く。挨拶の為也。

三月十六日　金曜
【晴天】
朝、湯。葛城ニ行く。天気よろし。
十合呉服店にて本立組立式を買ひ、大丸にてペン夾皮製のもの買ふ。帰りて中食。離れの安岡さんより、安着御祝として鯛二尾頂く。一尾京都に持つて帰ることとす。電球やにて百燭電球買ひて来る。これは池田さんに返却するため也。
京都にかへる。二時半家を出で急行電車、帰宅四時半なり。けふは早かりしものと見ゆ。五時十五分家を出で沢村〔専太郎〕君の送別会に行く。八時かへる。仲野さん来てゐて音楽会のかん定してゐたり。少し早くねる。

三月十七日　土曜
朝、熊沢さん来る。府庁に行く。挨拶の為め也。和田〔不二男〕理事官は笠置に行かれ不在。浜谷氏に会ふ。それより向坂君のところに行く。土地のこと頼む。図面作製せられたる由。昨日実地に行かれたりと云ふ。住友銀行に行く。一千円あづける。大島さんのところに行き話ししてゐる。四時かへる。空腹。夜、論文。

三月十八日　日曜
朝論。雨ふる。しきりに降る。午後中食後、世良君のところに行き田中楢一君のこと頼む。其より内藤〔虎次郎〕先生見舞に行く。よろしき方なり。又小島君のところによる。不在。それより粟野〔秀穂〕君のところ

に行く。つひに話こむ。七時帰宅。夜、論文。一時臥床。

三月十九日　月曜
雨ふる。昨日より雨ふりて梅雨の頃のやうなり。あたゝかなることはよけれど心地よろしからず。梅など咲く間もなく雨に降り濡れて地におつるも惜しき心地したり。
けふは中村善太郎先生を訪問する。仙台出発も近ければとて、昨日行くべきところをけふ行く。朝早く起きて行く。つい話しこみて中食の御馳走になりたるは誠に忙しき内のこととて気の毒の至りなり。早く帰らんとしたれともこのさまにて、自ら気の長きには愧づること多し。午後かへり途、学校に行き小酒〔儀三〕井氏よりの手紙にてもあらんかと見たれとも机の上になし。帰るとき、隣春山さんよりおはぎ頂く。中村、小島両君より同時に葉書頂く。共に家のことなり。小島君のところよりは岡本一郎さんの家あとのこと言ひ来られ、中村直勝君のところよりは其近隣の家のこと言ひ来らる。岡本氏の家を見に行く。内に入らず。帰り湯に行く。坂口先生令嬢にあふ。夜、論文。
雨ふる。止む間なし。水にても出づべしと思ふ。十二時臥。

三月二十日　火曜　　晴　暖
朝少し早く起き論文。手紙をかゝんとするも論文のことに気をとられてゐる。中食後少散歩。書物読む。書く方進まず。
夜、中村善太郎さん出発、八時五十二分ノ汽車、見送人多し。那波〔利貞〕・島〔文次郎〕さんなど早くより来らる。九時半帰る。
風邪の気味あり。日記つけて臥床。

八月三十一日　金曜
論文のこと忙し。夜、赤堀氏宅訪ふ、不在。

九月一日　土曜
午前十一時五十幾分東京大地震。京都にても大に震ふ。図書館にあり目まひの如く感ず。
荒木氏ニ論文浄写頼む。

九月二日　日曜
【晴天。あつし】
八時発汽車にて山陰に向ふ。鳥取駅にて号外。東京方面大震災、ついて大火災となり山本〔権兵衛〕首相暗殺説など伝はる。
浜村温泉五時頃着。温草屋〔煙草屋ヵ〕旅館。

九月六日　木曜
岩井温泉に向ふ。

九月八日　土曜
朝、京都に向ふ。八時前着。初めて厨川〔辰夫〕博士凶変の報を耳にす。京都にも流言蜚語多し。
千代の父来り泊す。

九月九日　日曜
論文浄写つとむ。

九月十二日　水曜
~~木屋~~なはて〔縄手通〕三条下ル小坂氏の家に夕方行く。八百政にてクリームソーダ飲む。夕方もあつし。

九月十三日　木曜
小坂別荘主人来り、小坂別荘に論文の原稿さかしに行く。

九月十八日　火曜
【大学講義を初む。休講者少し。学生多からず】

九月十九日　水曜
大学講義。前学期の梗概を言ふ。

九月二十日　木曜
臨時教員養成所。龍谷大学尚ほ休講。

九月二十二日　土曜
地震〔ママ〕教室ノ写字の人に浄写頼む。畑谷氏来り。

九月二十五日　火曜
【龍大国学の学制組織を考案すべきこと】
谷本〔富〕・米田〔庄太郎〕博士招待。十二時半帰る。中村屋にて赤松〔智城〕・宇野。
姑射良雲君〔東京帝大国文学1918卒〕圧死のこと赤松君より聞く。陽君夫人病気危篤の報、谷本博士まて来ると。

九月二十六日　水曜
講義。畑谷氏ニ行キ論文浄写ノ末頁トリニ行ク。

九月二十七日　木曜
【宗教学辞典のこと龍大にて相談】
臨教。龍谷大学。
姑射文学士令家八人圧死と云ふ。森川君談。
窪田君訪問、不在。帰れは畑谷氏あり。十一時まで居る。

九月二十八日　金曜
【ミュゼアム陳列案を造ること依頼さる】
国史室相談会。

九月二十九日　土曜
論文浄写忙し。荒木氏に百五十六枚浄写料として二十円御礼。山鹿〔誠之助〕君を煩すこと甚し。第二章自写了ル。

十月八日　月曜
夜遅くまでかく。講義下調なし。

十月九日　火曜
午後講義。一ー二までなす。二ー三の講義休む。家にかへりて論文とじる。夜遅くなる。

十月十日　水曜
論文出だす。

十月二十四日　水曜
講義。一ー二、二ー三。帰宅のとき内藤先生宅による。不在。夜、少し頭痛と疲労あれども散歩する。月光清く心地よくなり、疲労をおして明日の臨教講義調。

十月二十五日　木曜
臨教、推古美術及山背大兄王ノコト。
龍大、神話第一回。
今日は講義下調ありし為めか、はじめて疲労なし。

十月二十六日　金曜
【図書館、支払、中外、明照〔卿ヵ〕／講、講演題目／陳列／大学、読史会、紀念事業の会、赤堀氏】
午前陳列館に行くこと。

十月三十日　火曜
【書物屋】

十月三十一日　水曜
叡山に行く約束あつて朝早く眼覚む。六時半頃一時晴れ気味となるによつて出掛く。暫くして又曇りあり。三条まで行きたれども会合する人々来らず、中止して書肆細川清助に行く。維新関係の諸書選択して帰る。夕方阿部氏の家の辺見行く。~~賀茂神社に祈祷頼む。明日地~~
夜早く臥床。

十一月一日　木曜
【朝くもり。日中晴。夜に入って雨あり。】
午前七時過起。臨時教員養成所講義。けふは家作

敷地の地鎮式を行はんとする日なり。十二時帰宅後敷地に行く。度会律君祭式、三時半まで土地に居たり。宇野・羽渓〔了諦〕君来てゐた。四時半家を出でゝ坂口教授を訪問す。宇野君と一所に行く。野々村〔直太郎〕先生の事件である。山鹿・赤堀両氏と晩餐を共にする日であるので、坂口先生宅にては中途にて帰り、急き黒谷前より車を戻して家にかへる。車夫は東京の罹災民にて土地不案内。岡崎より下の方に駆け出さんとするなどあつて気の毒でもあり又一寸滑稽でもあつた。夕食を二氏と共にし十時了る。
けふは温くて七十五度。朝より夜まで七十五度。日中の暑さ夏の如し。地震にてもあらんなど人々言ふてゐた。

十一月二日　金曜
【朝はる。くもり】
八時起。けふは佛教専門学校の峻〔竣〕工式。十時よりの案内にて九時過ぎ大急にて行く。あつきこと甚だし。法然上人、及び先徳の遺品遺墨の展覧あり。十一時過挙式。○時半了る。導師管長山下現有氏師。桑田〔寛隨〕校長に逢ふ。二時かへり昼食。式にては折詰、菓子の饗応あり。
午後二時半、また金曜日会合のため行く。三浦先生病気にて休会。

十一月二十三日　金曜
【発信　木村弥三郎、明治火災、四条富小路角、廿四、廿六日夜きてもらふこと。羽渓君　朝の御礼】
朝くもり。けふは新嘗祭なり。
朝普請場にゆき、其より高見氏家に行く。天気のどやかにて霧たちこめたれとも、秋らしき爽かさをもつ日なり。家にかへり少しく用事。
午後、西洋より持帰る書物を片附けんとし廊下にある箱を整理す。
三時より赤松義雄君の宅を訪問する。不在。菓子をたはこやに預けて帰る。
夜、書物片附、其より講演□〔記ヵ〕の書物読む。
Schmiedel及Spengler、Kleman〔Klemann〕を読む。
夜くもりたれとも深更に至つて天晴れ月朗かなり。

十一月二十四日　土曜
【山川。高井。□〔剣ヵ〕橋。／立前。史研究会講演。晩餐。木村。伊達弥助氏】

十一月二十五日　日曜
【講義下。読史会下調。／下阪】

十一月二十六日　月曜
【帰京。講義】

十一月二十八日　水曜
【夜準備】

十一月二十九日　木曜
【夜準備】

十一月三十日　金曜
【準備】
朝、陳列館説明を記きしるす。一時まで。
午後、図書館にて参考書ノ処、山鹿君より色々と日本研究の参考書を見せて貰ふ。

十二月一日　土曜
【読史会。晩餐会も三十名ほどとなり盛会。今村考三君静岡より、清原君の広島より来る。各自の自分紹介あり。江馬〔務〕君が読史会の歴史を話するなど愛嬌あり】
晴天。読史会大会のある日である。朝起きて講演の準備をせんとした。併し清原貞雄君の来るにつれて、これもだめとなり、一とき談し合ひた後、清原君の三浦先生の宅へと出で行く後準備す。十時半。十一時近くなり。十二時過出て陳列館に行き、図書館に行き、其より集会所に行く。けふは未曾有の聴衆にて無量五百を算ふと思はれた。

幕末に於ける諸藩の富強策、牧野信之助。地震史の一考察、今村孝三。浄土教と特殊民、喜田教授。休憩。欧米人の日本研究、西田。錫蘭〔セイロン〕印度に於ける美術、天沼〔俊一〕。欧米の古文書館（三浦）。各自四十五分と云ふ予定なりしも、喜田博士の一時間半、西田の一時間半なと長きものありて八時閉会。夜、清原君と久し振りに話し一時半まで話し込む。

十二月二日　日曜
【晴天】
清原貞雄君、昨夜とまったので夜は遅くまで話したゆへ、朝起きることも亦遅くなった。朝食後話しする内、中村直勝君の宅よりの使あり。中村氏も加はり昼頃まで話す。午後清原君出て行く。山鹿君のところに行くとて出て、夜やゝ遅く帰り来る。午後普請場見る。

十二月三日　月曜
朝、清原君出かく。読書。三時頃清原君と共に普請場に行く。夜、停車場まで見送る。錦田義富君に会ふ。汽車中にて。魚崎に帰る途なりと云ふ。夜、講義下調。夕より雨降る。

十二月四日　火曜
朝遅し。講義下調せんとしかまとまらず。学校にて原稿つくる。
弁当や開店一周年とかにて御馳走をする。

十二月五日　水曜
講義原稿作らんとしたれとも頭の調子悪し。学校にて調べものせんとしたれとも能はず。休講とする。昨日は天気の加減にや心地悪しきこと夥し。京都の冷たき水を浴ぶるやうの冷たさが来た。じめ〳〵する天気には寧ろ屋外に出づるをよしとする。
普請場に一寸夕方ゆく。棟梁まだ居のこりたり。

十二月六日　木曜
雨ふる。少し温かくなる。却つて気もちよくなる。二三日前のいやな寒さにはたえかたき心地したれとも、けふは雨ふりて陰気なこと変らされど、雨には雨らしきのどかさもあることとてよろしい。
臨教講義。龍大講義。夜、散歩、十時半寝。

十二月七日　金曜
【雨、朝はれ】
読書。種々問題考按。午後普請場。三時より金曜相談会、五時前了。夜、読書、問題考按。島津重城君書物返戻に来る。

十二月八日　土曜
【曇天】
隣家の西川氏来る。瓦のこと言ふため。普請場、大森氏に逢ふ。中食後大工に行く。不在。稲葉氏に行く。米屋に行き帰らんとするとき、稲葉卯之助様の奥様帰る。暫時話しし後かへる。家にて読書。法制を中心としたる徳川時代史。夜、クノー〔Heinrich Cunow〕唯物史観を少し読む。高井望氏〔22入・哲学〕に手紙かく。松原寛、芸術教育〔イデア書院1923〕を読む。面白く軽くかくのでつい読みふける。十一時半。

十二月九日　日曜
朝晴天。安部氏立前の日なり。

十二月十日　月曜
【驟雨】
朝大学。午後大学。書物持ちかへる。重し。夜、準備まとまらず。

十二月十一日　火曜
【準備整はす。近頃疲れるためか統合力遅鈍の感あり】
講準備。
一、

二、小橋〔浅雄〕君〔22入・国史26卒〕報告

十二月十二日　水曜
【曇。驟雨】
朝、講準備。午後。暗き日なり。夜休養、疲労のため。

十二月十三日　木曜
【晴。終日時々時雨来る。道路悪し。トーテミズム中途マデ】
朝、臨時教員養成所試験。欠席二人あり。午後、龍大。卒業生の記念写真とて撮影する。帰途宇野君に寄る。不在。家政女学校にて三十分話する。夜、陳列館同人の忘年会、菊水。

十二月十四日　金曜
【受信　古田良一君。発信　清原、宇野君】
朝、普請場。午後、大学。史林編纂会あり。昨年史学地理学界を一層完全にせんとする議を予より出す。種々論議したれとも、要するに現状維持にて終り、来年度より行はんとするので決。五時頃迄右の論議をなす。いつものことなれどもつまらぬことに時間を費すこと惜しし。史林編纂会は行かぬやうにすること、研学のため必要のことなりと感ず。
夜、休養のため散歩。夜店なり。川の西の弁財天の縁日なり。植木屋多く出でず。道、風気。

十二月十五日　土曜
【朝晴。午後曇天。水の如くに冷ゆ】
朝、少し遅く起き（九時）、食後書物片附。厨川氏の書物棚に書物詰める。昼までかゝる。少し読書。丹羽正義君の歴史学概論〔中外出版1923〕読む。三時頃電灯やさん来る。四時散歩。普請場、棟梁に会ふ。
夜読書、丹羽氏著続けて読む。後、都市についての研究少し書く。十一時臥。心地よき日なり。昨日休養したる為めか。

当用日記補遺
登記　弐弐四参　大正十弐年参月参拾日
番号　第弐　　第参六八八
　売渡代金　壱阡弐百弐拾円
　　大阪市東区北久太郎町壱丁目
　　甲弐拾七番地
　　売主　　盛興合資会社
　　右無限責任社員
　　山田留治郎
　　京都市下京区伏見街道筋五条上ル金屋町
　　右代理人　菅谷幸太郎
　　買主　　西田直二郎
物件
京都市上京区下鴨中川原町
　　六拾八番地ノ参
一、山林　弐畝壱歩
以上

登記　弐弐五〇　大正拾弐年参月参拾日
　第弐　　参七参参
　　売主　　森下庄次郎
　　買主　　西田直二郎
代金　壱千六百六十円
　　大正十二年参月参拾日
　京都市上京区下鴨松原町七
　　森下庄次郎
物件ノ表示
京都市上京区下鴨中川原町弐拾九番ノ参
　畑　弐畝弐拾参

当用日記　大正十五丙寅年（東京博文館発行）
一月三日　日曜
夜七時三十幾分京都出発。

一月四日　月曜
長府着。銭司跡。湯田着。

一月五日　火曜
湯田。山口。

一月六日　水曜
湯田出でゝ三田尻。柳井津着。

一月七日　木曜
夜、柳井津発。

一月八日　金曜
大阪、京都。

一月十一日　月曜
【受信　宇野円空、講演会承諾】

一月十九日　火曜
【受信　植村清之助帰朝ノコト】

一月二十日　水曜
【本館第九回報告。山口県教育会。梅原君シンガポール。植村清二、本郷根津西須賀一、猪飼方】
【受信　○佐古慶三君ヘノ年賀状戻リ来ル。○村田初一、北多マ郡小平村野中新田赤松保羅方。○岡崎（巴里）】

一月二十四日　日曜
【受信　沢村、篠田禎蔵、麹町区三番町四十三、清水清之助方。訪問者、浜本、木戸堅次】
八時四十分の汽車で向日町に行き、自動車にて二十分も行けば〈大原野〉村まで行ける。それから山路にかゝつて十二三町ほど行くと山門か見える。山門は大破してゐる。仁王尊かあるが赤い扉ははづれてゐた。門を入りて三町ほど行って右に廻れば石階が心地よく見えだす。閑静な寺だ。二階立の家があるが一寸徳川時代初期の家のやうな形をしてゐる。蝋梅や三□〔樫カ〕と云ふ木があった。庫裡で火鉢にあた〔ママ〕てゐるとさほどてないか、山は冷気かして一寸里では考へられない冷かさである。椽側の寒かったことよ。三時過ぎこゝを辞して、四時、勝持寺に行きつく。住持は中村豪詮師で便宜を計って下さった。こゝより二十五分かかる、自動車で、停車場まで。

一月三十日　土曜
神泉苑のこと調ぶ。

一月三十一日　日曜
学生答案読む。

二月二日　火曜
朝、書斎調べて原稿さかす。
午後、第一高等女学校。社会思想の話をする。二時間。
夜、明日の演習の批評するため大学に行く。九時了り十時頃かへる。それより演習のもの皆読む。十二時過まてかゝる。

二月三日　水曜
節分。大学講義。演習の批評。
教授会ありて、まづ商科大学卒業生を帝大卒業生に准するやの件、准せずと定まる。後、学生指導部の狩野〔直喜〕教授の社会科学研究会処分の件、報告あり。学生指導部は已に二回社会科学研究会の善後策につき協議会を開き、其一回は午前二時まで協議したりと云ふ。驚き入りたる次第である。社会科学研究会は解散を命せず善導することにする。其指導者は各学部より出づとし、西田〔幾多郎〕幾・藤井〔健治郎〕健二教授、部長より指名さる。両教授とも好まざる風あり。藤井教授よりは断るの議出でしも、皆これはこの席上にて決すべきにあらずとなし閉会す。テニスし、夜史学地理学同〔攷〕攻会の編輯会。十一時

かへり講読の予習。

二月四日　木曜
朝、講読の予習のため登学。加藤仁平君来る。和魂漢才のことなり。又、岩橋小弥太君、相田二郎君伴ひ来る。昼食、講読、演習。かへり食後明日の講義用意。頭つかれたるを以て十時半臥床したれとも不眠。三時半まで目さむ。

二月五日　金曜
【晴。寒気きびし。のど痛し】
朝早く起き、床中より読書。但し少しまどろみ講義用意す。
大学。国史概説、史学研究法につき試験問題を出す。講義、国概説、他界表象のこと話す。
龍大、大急き行く。金蔵寺、勝持寺文書見せて話しす。
夜、史学科予餞会。出席者少なし。楽友会館。食後、黒正氏と共に米国人と話しする。かへり十二時。夜不眠。

二月六日　土曜
朝、沐浴。つかれたるため也。
久し振のゆく〔ママ〕つりしたる気分にて読書せんとす。
府庁電話をかけて銭司の発掘のこと十四日十六日を頼む。
橋川氏にも電話かけたれとも不通。
午後、書斎整理せんとす。夜、史研答案しらべする。了る。

二月七日　日曜
【晴天】
【発信　星野入会者の件。中津川直二〔氏ヵ〕□】
【受信　菅原】
大阪に行かんとしたれども咽喉少し痛みあり、電車内の塵埃を吸ふことも如何と思ひやめる。朝、先般よりとゞこほる用事を片附けんとす。書棚の整理を思ひ書物棚の新製など考へて図をかく。午後同攷会の用事少しした。
歴史と地理二月号到着しければ載ゆる論文見る。清原君・黒正君の文見る。
藤井幸永氏来る。東京よりの味噌漬賜はる。夕方帰。夕食後卒業論文読む。伊藤八郎君〔23入・国史27卒〕読了。岡本〔隆男〕君〔23入・国史26卒〕のもの少し。

三月七日　日曜
朝、山田賀一氏来らる。

三月八日　月曜
史学研究法試験。
アドラー氏ジムメルの精神史か意味〔Max Adler, *Georg Simmels Bedeutung für die Geistesgeschichte*, Wien, 1919〕読む。午後、白石書簡近衛家読む。

三月九日　火曜
【狛田行】

三月十日　水曜
【夜、中原氏送別。朝、大学。白石研究。加佐郡予定出スコト】

三月十一日　木曜
【受信　河野義宣〔24入・東洋史27卒〕ノ論文うけとる。十六日教授会ノ報知あり】
雨ふり後やむ。衣更着月の如き日なり。しめりて寒さの身にしむ日なり。
朝、晴れ〳〵しからず、湯に行く。昼なり。昼食後少憩。少しまどろみ、後書斎整理。昨日のつゞきなり。六時過漸くおさまる。やゝ居心地よき書斎となる。夜、読書。

三月十二日　金曜
【天気よろし。春来る。大川為芳君来学ノ筈。後一時－四時迄。佐藤汎愛氏蔵、敦煌発見仏説十

王経千仏名経ノ展観アリ（豊国神社）】
【発信　魚澄・中村氏、史蹟報告の原稿依頼】
【受信　原田種夫〔25入・西洋史29卒〕試験答案「地方伝説」受取】
朝十時半過登学。哲学研究室に於てトーテミズムの本探索す。これにて昼までの時間つぶれる。食後、直ちに佐藤汎愛氏の十王経及仏名経の展観を見に行く。一時着。豊国社。廣瀬都巽氏〔和鏡研究者〕に会ひ和田不二男氏〔恩賜京都博物館〕に逢ふ。其他好事の人々来る。松本文三郎博士もノートをとつてゐられた。神田喜一郎君、橋川正君等あり。西光〔義道〕氏に逢ひ、今明日中弊宅に来訪すと云はる。二時学校にかへる。大川氏来らず。空腹をこらへトーテムの書読む。アメリカンアンスロポロジイスト四冊ほど読む。五時半退校。夕食後西光氏来らず。十時前より神泉苑のこと二枚ほどかく。十一時臥。

三月十三日　土曜
【西光・大川二氏来訪。午前在宅。龍大論文よむ。沢村・黒田君訪問すべし】
午前、読書。後、研究室。大川氏来る。五時学校を出で沢村君宅訪問、不在。史学研究会のこと頼み置く。夜、西光氏来。

三月十四日　日曜
【宇野君訪問。雛陳列】
朝、雨ふり冷気つよし。
午前、神皇正統記読む。二時頃午餐。終る頃、赤松智城君より電話。谷本老博士還暦賀宴及慰安事業の相談会開催のこと出席を乞ふ由。三時半出席。小西〔重直〕博士、熊木〔捨治〕、戸津〔吉之助〕、富田精、羽渓等あり。六時まで相談。四月頃尚ほ会合を一度開くべきことを定む。
六時より相模屋にて植村・神田二氏送迎会なり、出席。十時半まで話す。帰宅後少時読書。十一時半臥床。

三月十五日　月曜
朝、尚ほ雨の音を聞く。
午前電話、龍谷大学論文廻されんことを言ふ。即ち十二時までに読むことを言ふ。京都大学より論文さい促。是また十二時迄とす。一時半より博物館に雛陳列を見に行く。江戸前にて夕食。後大学に行き、村上〔勇〕〔23入・西洋史26卒〕ノ論文の参考書二冊携帰り読む。十二時臥床。

三月十六日　火曜
【口頭試問。後教授会。図書委員改選】
八時より口頭試問につき出校。八時五分前教官室着。五六人の教官先着。内藤先生、狩野、西田、藤井等の諸先生見えしは却つて珍らしく思はる。坂口、三浦等諸先生の後れられたるは同様意外の感あり。口頭試問ハ後藤基次〔23入・国史26卒〕より始まる。国史　伊藤、岡本、西洋史　村上、地理　塚本〔常雄〕〔23入・30卒〕、午前中に四五人済む。午後五時までかゝる。後、読史会あり。後藤、魚澄氏講演あり。疲れもあり、後藤氏のは卒業論文にて読み、魚澄氏のもいづれ活字になることとてやめる。南北朝時代の高野山の去就。
家にて読書。加佐郡志〔『加佐郡誌』1925〕、本朝世紀、神泉苑読む。

三月十七日　水曜
龍大口頭試問。八時家を出で口頭試問。三原、鎌田。十一時四十分終り五十分龍大を出で、帝大教授会に行く。途中大丸にて中飯を認む。
教授会。
卒業論文考査。
図書館評議員改選。鈴木〔虎雄〕氏当選、部長指名による。
図書購入委員改選。三浦・松本・新村〔出〕満期。選挙ノ結果、小西、西田直、吉沢〔義則〕当選。
長氏論文審査員選挙。坂口、矢野〔仁一〕、羽田〔亨〕同　点、西田、石橋〔五郎〕。
部長任期二年とすべきや否やのこと採決。今これ

を議せぬことにする。
北海道帝大予科卒業生にして倫理に選科として入りたるものを本科に入れること、藤井教授より提出。追認すること。

三月十八日　木曜　　晴
午前、読書。午後大学に行く。島田〔貞彦〕君と史学研究会のこと打合せする。杉浦丘園氏に島田君電話かけてもらふ。西村総左衛門は予か行くことにする。諸用すまし、四時頃読書せんとす。今日は「たん栄」にて宇野君送別会なり。四時過より一寸テニスす。五時五分前出で三条烏丸西の西村氏宅に行き眼鏡画借用依頼す。それより丹栄に行く。羽渓君独りあり、談ず。話し込み、十二時前まで居たり。かへれば十二時半なり。

三月十九日　金曜　　曇り　寒さ
【いぢ悪き寒さなり。五十度を下る。一日中気持わるき寒さに雨ふる気味なり。京都式天気の特色を出す】
【受信　山内得立君来信。佐野氏の件、入学試験中止のこと】
府庁電話ある。出張のこと言ひ来る。予定をつくる。大学歴史の試験の答案見る。採点終る。一時頃になる。食事後、前田南禅寺来る。登史子の成績のことにつきいろ〳〵言ふ。村田初一氏来る。明日入学選抜試験なり。
四時過読書。歴史論考へんとしたれとも、今日は金曜会なるを以て話の材料にと思ひ少し論文独文のもの読む。六時食事。小使来、英語試験の答案もち来る。書取及和訳なり。歴史答案渡す。
夜、金曜会。小川茂樹〔25入・東洋史〕、柴田実〔25入・国史〕参加。肥後〔和男〕〔25入・国史〕、池田〔源太〕〔23入・国史〕、塚田〔忠泰〕〔24入・国史〕、水野〔清一〕〔24入・国史〕等。肥後君、川中島合戦のこと言ふ。十一時散会。塚本、伊藤八郎来、会に参加せず。

三月二十日　土曜　　雪あり　寒冷
【受信　藤井甚太郎君より書籍明治維新史〔藤井『明治維新史講話』雄山閣1926〕到来】
史学研究会講演会、講演者。応挙ノ眼鏡、黒田〔有馬〕源次君。支那嵩山少林寺の石塔群、沢村専太郎君なり。午前黒田君宅、沢村君宅ニよる。十二時になり、それより陳列をなし二時に開会。来聴者五十人ほど。学生集会場階上にて寂しげに見えたり。けふは雨ふり雪さへ積りたる近来なき天気にて出足悪しかりしなり。
黒田君講演四十五分ほど。沢村君一時間ほど。四時に終る。眼鏡画展覧は杉浦丘園、西村総左衛門、堺市前田氏、黒田源次諸氏蔵するところなり。
杉浦丘園氏蔵のものは包みの布に蛇の印あり。茶色の布にて和蘭物なり。意匠面白し。西村総左衛門のものは眼鏡は日本製かと思はる。画は応挙の肉筆なり。富士山の図、岩上より大海を望む図、大仏殿画等おもしろし。

三月二十一日　日曜
【版画展覧会。村田初一君ノコト。夜、東福園住宅組合宴会】
【受信　大村豊吉郎〔25入・史学科・法学士〕論文。千覚二郎〔宗左〕〔24入・史学科〕手紙。答案ヲクレルコト。】
午前、沐浴。福村氏帰坂する。午後、読書。其後少し散歩。植木やに行く。五時帰り、少しして東福園の会に行く。早く済む。帰来後読書。栄花物語読む。

三月二十二日　月曜
【東福園宴会。三高出身文学士会。村田君のこと本庄君に頼む。月末分る由なり】
【受信　北河内郡守口滝井五〇四。天野高信〔25入・国史〕論文】
午前、読書。論文のこと熟考す。午後、大学。英語書取答案採点、事務室にて渡す。五点、六点ほど増点する。〔A〕、〔B〕二十五点ほどになる。

府庁に行く用事を捨てゝ岡崎図書館に行く。版画展覧会を見る。注意すべきものに、神田氏の洛中洛外の図ハ承応のものなれども、北野、柳原等新町名をつけたことを下の方に注記しあり。市街の膨張することを見る好資料たり。
吉沢氏塵劫記、寛永の版あり。大数と云ふことあり。これは大なる数。小数とは分厘毛糸の如き小なる数のことなり。蔵の絵などあり。蔵に米を入れることを計算する法など記しあり。
夜、支那料理。其中、八宝飯など美味。

三月二十三日　火曜
【卒業生会】
【受信　大阪市浪速区木津川一丁目紀ノ国木材店　村田初一】
朝、読書、沐浴。午後二時頃より伊藤、後藤、岡本来る。談話して五時頃になる。塚本、三高の試験の監督に行き、それを果して後来る。更に話はずみて夜に入り、遂に午前一時過まで話す。
明日は家政女学校卒業式なり。
朝、英語書取答案訂正。英語書取更に五点増点。三十点のもの之によりて大分生ず。

三月二十四日　水曜
【狛田村の歴史好の人に安宅新兵衛。
Hellwig? Das geld
Knep〔Knapp〕（geld）論
誰レカノDas heilige geld】
【受信　匹田直氏】
朝十時より府庁ニ行き出張の打合せをする。阪谷氏にも原稿依頼する。正午まで。正午楽友会館にて食事。小島昌太郎、汐見三郎氏同席して貨幣のことの話しする。いたく面白い話をきゝたり。
二時、大学研究室。英訳エルダー〔Charles G. Elder〕氏に持行くこと小使にたのむ。直ぐに直して貰ひたく。
教官室にて〔A〕、〔C〕の成績見る。国語漢文共に悪し。〔B〕は六十幾点の平均ありたり。中村健一郎氏に逢ふ。久し振りに話しする。帰宅。前田いく来。女成績よき由。草餅到来。夜七時過家を出で、宇野円空君東京出発を見送る。森川夫人・宇野夫人洋装、羽渓氏と共に帰り来る。小野徹昭氏に停車場にて逢ふ。帰宅後内藤氏論文、読書。

三月二十五日　木曜
【午後教授会。入学生決定ノコト。梅原。独乙】
午前。
午後、教授会。入学試験結果決定。史学科六名入学許可。これは高師のものか本科に入るものなり。支那人〔D〕は点足らざるも特別扱となりて入学。〔B〕氏も入学。漢文悪しく35よりなし。
仏教学講座に関する件、文部省よりは宗教学として言ひ来りしも、仏教学講座と改称することを言ひ送る案、これは波多〔精一〕野氏案なりしか、浜田〔耕作〕教授より宗教学第二〔ママ〕講座とする方よしと異見出で、議論長く二回休憩する。波多野氏欠席なるをよび迎へて議論したりしか、最後投票にとひて仏教学講座とすること多数なり。
夜、北野天満宮参詣。道同道。舟岡省五氏ニ帰途電車にて逢ふ。

三月二十六日　金曜
初めてまとまりたる時間を得べき日なり。思考、読書に一日を送らんとす。この日は史蹟調査のため天田郡に行くべき日なりしを一日延引さす。内藤記念論文も少しまとまりて考へんためなり。
寒気つよく心地よからず。京の寒さを見〔ママ〕におほゆ。
夜、神田君宅訪問、帰れは十時過。名刺や時計屋等による為め也。
あす早く起くべきなれども少しく用意し臥床。寒さの甚しきにこたつなど再びもち出して寝る。夜十二時過ぎたれば寒気強く厳冬を思ふはかりなり。翌朝大雪積るを見て、この寒さのあるは無理ならぬことと思へり。

三月二十七日　土曜
【旅行】
八時十二分汽車。福知山着。郡役所。四時過ぎ汽車にて河守に行く。河守泊。一力楼。雪深く寒さつよし。天田郡役所にては日中牡丹雪ふる。

三月二十八日　日曜
【旅行】
河守町より外宮、内宮を見る。内宮にて昼食。夜、南山観音寺。金剛院及他一人の住職来る。其絵画を見る。

三月二十九日　月曜
朝、清園寺。一時十一分の汽車にて舞鶴に向ふ。三時過着。四時より東雲村に向ふ。途中藤神社を見る。七時過舞鶴にかへり来る。夜泊、清和楼。
けふは天気晴朗、春日灼々たり。

三月三十日　火曜
【旅行】
朝、舞鶴町中。円隆寺、朝代神社を見る。午後一時汽車にて新舞鶴に行き、自動車にて汽船の出るところまで行き、発動機船にて〈　　〉湾に行く。舞鶴軍港ニハ軍艦日進、八雲等四〔艘〕曳あり。機関学校の卒業式なり。西大浦村多禰寺による。五時頃着。少し見る。本尊及文書等、夜も絵画等見る。十一時過臥床。明月皎々たれとも窓外寒くして見る気にならず。

三月三十一日　水曜
【課長に逢ひ阪谷氏原稿のこと聞くこと】
朝早くより起き出で丶本尊傍の観音堂、熊野社を見、文安二二年の石碑等撮影。二王門仁王を動かす。時間とること夥し。十二時過出で山を下りて〔河〕川辺中村に行く。貞治の石灯籠、延慶の棟札あり。

四月一日　木曜
朝起き、新聞読む。沐湯。
午後、道病院に行く。三時自動車にてゆけり。
内藤論文。五時頃、桑島敬直氏来る。道路ノこと話す。
夜手紙。梅原史蹟、藤井礼状。
史蹟調査のこと記す。

四月二日　金曜
【鈴木氏用事。江見村、字書キ送ル。病院行。府庁】
朝起き食事用意。八時起床。十時頃より一時まで読書、論文。ラムプレヒト読む。
午後、納戸より合服とり出す。温気急に来り晩春の如く、合服にても暖かすぎ外套など着る気おこらず。
病院に行く。道手術する。院長へ挨拶する。八時出で丶帰途灯影小塾による。
夜九時より雑用。十二時まで手紙かく。此頃手紙をかけば夜の更けること早きに驚く。これでは良夜も読書思惟の料とならず。

四月三日　土曜
【朝雨しきりに降る。夜晴れたり。風さむし。一燈園結婚、天香氏長男。田中楢〔ママ〕三君ニ手紙。】
朝、桑島氏訪問さる電話。山田夫人より植物園デーのこと通知さる。行きて見る。寒風吹きて植物園も寒し。天気曇り、折角の大祭日も春心地少し。
植物園苗木買ふ。大したものなし。カンナ、ダリヤ球根少々ニ、ピカンサス等。午後種々の人来る。電話等。大阪立川氏、桑原氏同伴来らる。天満宮史料持参。桑原氏は新村先生知人なりと云ふ。
病院に行く。夕食す。其より帰宅。十時前史蹟のこと書く。一時までかく。就寝。

四月四日　日曜
【天気晴。朝寒し】
朝七時起床。自ら朝食の用意する。時に中桐確太郎氏来、談話。大西祝二十五年記念のこと、警醒

社出版に関する件のこと。
山下諒一氏ニ文字かき送る。かれこれする中、朝の時間つぶる。
午後、史蹟調査報告執筆。田楽のことかく。天気よく筆をとるに心地よし。夜、同様つゞきをかく。正十二時終り寝。

四月六日　火曜
午前、勉強、内藤。午後、学校。夜、原稿かく。十二時迄。

四月七日　水曜
朝、内藤論文。午後。夜、歴史と地理の編纂会。十二時迄書く。

四月八日　木曜
朝、起き出でたところ少し頭痛の気味あった。何の為めか不明。風邪をひくやうのこともなきにと思ひ、少しばかりのことなれば別に気にかけず、食後少し散歩。十一時頃論文などのことをしてゐたが余りはかどらず、かれこれする内に頭痛あり。少し熱あるやうなり。押して読書してゐたが余り身いらず、十一時半床をのべて寝る。よく寝込む。午後三時昼食。気分よけれども頭痛去らず。病院に行く。七時かへる。今夜、公同組合の相談会あり。十時過まで話してゐる。桑島氏宅にて。教育資金のこと等。十時半寝。頭痛と熱あるため。

四月九日　金曜
朝早起、心地よし。冷気あり。朝、内藤論文。午後、史蹟。夕、病院。夜。

四月十日　土曜
【大学に行く。時間割ノコト。内藤先生宅。杉坂ノコト。採点ノコト】
早起。大学に行く。羽田氏に逢ふ。内藤博士記念論文已ニ締切りたる由を云はる。驚く。神田君も遅れたりと云ふ話に更に驚く。研究室にて記念論文かき続く。三時帰宅、少臥。少し史蹟かく。夜、史蹟かく。

四月十一日　日曜
朝。
ポンソンビー〔Ponsonby Fane〕氏来。
病院。
夜、井上以智為君来る。十一時過まで談話。大阪関西大学講師のこと。

四月十二日　月曜
朝、大学。時間割のこと伊津野〔直〕〔文学部書記〕依頼。研究室整理、ポンソンビー氏来室。昼食、食堂。午後も室片付。内藤博士来室。梅原君のコロンポーよりの拓本渡す。
夜、史蹟少しよりかけず。

四月十三日　火曜
【授業始。淑徳〔ママ〕女学校、講師のこと大島氏より】
大島徹水氏早朝来訪、御見舞、其より読書。
午後大学に行かんとしたれどもやめる。研究室より電話。内藤博士、清原頼業の筆蹟見たしとのこと故、井川〔定慶〕氏に頼まれ電話井川氏より来る。松野〔遵崇〕君〔国史研究室助手〕に依頼して岡本君宅に小使走らせ岡本隆男君に逢ひ度きこと言ふ。夕方岡本君来る。京都女学校に奉職してゐるからとのことにて、他のものを推薦することを願いて帰る。読書、史蹟原稿かく。

四月十四日　水曜
【演習始なれども三浦先生か第一回にさる】
朝、岡本君より電話あり。一中の森下氏、加藤鉄三郎氏〔国史24卒〕に話したれども精華女学校講師は都合つかずとのこと。其の内、京都女学校にて徳重〔浅吉〕君〔国史25卒〕の細君に逢ふところ、徳重君方へ小橋浅雄君〔国史26卒〕来りて就職のこと依頼し

行きたりとのことなりし由、小橋君に来てもらうこと頼み置く。史蹟原稿かく。午後大学、史蹟のこと調ふ。神泉苑のこと。方丈記見たり。史料綱文見る。電話ありて魚澄氏五時半来るとのこと故、五時大学を出で帰る。
魚澄君六時来訪。龍大のこと、講義のこと話す。九時頃まて話し会ひたり。原稿少しかく。
明日、道退院の由。

四月十五日　木曜
朝七時、小橋浅雄氏来る。精華女学校に行くことにつき話あり。関西大学のことも話しをする。帰る後、大島さんに電話をかけて推薦方を依頼する。手紙をかき小橋氏方（相国寺西門前）へ遣はす。
田邊寿利氏来訪。民族のこと。刀江書院のこと。尚ほ一般社会学の話。折口〔信夫〕・柳田国男様達の話出る。千代を足立病院に遣はす。明治大学学生相良武夫と云ふもの行商なりとて来る。兼常清佐の変名を思ひ出し、田邊氏と話しをする。道、病院より帰る。正午となる。食後、大学研究室。講義来る土曜十七日開始のこと、掲示頼む。坂口部長より、予て学士院に願出したる研究費補助のこと採択せられたりとの通知あり。金は一年分のみなりと云ふ。まづそれにてもよし。研究上のこと考へなければならぬ。一年の成績を見てけい続するや否やか定まるとのこと。これをよいことなるべし。
塚本常雄君に藤原時代信仰の論文の批評する。
四時となる。少時テニス。五時ヒルシェヘルドの即売（府教育会館）に行く。フィヒテの本一冊かひ来る。夜グーチ〔Gooch〕読む。

四月十六日　金曜
【午後、井上君へ返事。岩田操、目のこと大学病院。府庁。松本文三郎さんに行きたきこと。内藤、狩野】
朝起き見れば天気和清。九時頃岩田操さんより電話にて大学病院にありと云ふこと言ひ来る。即ち病院に行き市川〔清〕博士に頼む。それより研究室に行く道にて、書肆に於て河上〔肇〕博士経済原論プリント、米田〔庄太郎〕博士歴史哲学ヴィンデルバンド〔『ヴィンデルバントの歴史哲学』弘文堂書房1925ヵ〕を買ふ。研究室にて少し用事。岩橋君への手紙かき楽友会館に行く道、投。食事。黒正氏夫婦、ヴィルドハーゲン夫人に逢ふ。天気よろしければとて散歩に出で、平安神宮神苑、清水を見てまわる。かへりに一休庵にて食事。九時頃かへり明日講読の準備、十二時了。
けふはよき春の日なれば一日を長く暮したり。

四月十七日　土曜
【神社研究会。稲荷社】
早く眼覚む。十時の授業なれば少し読書。原稿も一頁かく。学校行き前に一頁にてもかくこと珍らしい。講読、一般注意。ブルクハルドの生涯のこと。十二時了。其より神泉苑のことにつき大日本史料調査。十二時半まで調べ、帰宅中食。二時十分前出掛け神社研究会に行く。三時稲荷神社着。出席者、藤田、牧野、小牧、中村、~~鈴鹿~~氏あり。後より鈴鹿、猪熊、出雲路、魚澄君来る。研究題目等きめる。最初は中村、藤田氏。余は来年二月頃講ずることとす。題は神道儀礼なり。道にて河原町東洋亭にて珈琲のむ。

四月十八日　日曜
【奈良史蹟踏査会】
朝、小雨。奈良に行く日なれども躇躊〔ママ〕す。中村君に電話かけたり。やめると云ふ故。けふは史蹟報告の原稿かく。奈良鷲尾〔隆慶〕君に電話かける。

四月二十日　火曜
朝早起。学校。小牧君来る。史蹟原稿。府庁に電話かける。

六月三日　木曜
斎藤さんより電話かゝる。

六月九日　水曜
刀江書院主来ル。書物ノコト。
学士院ノ教育ノコト彼是。

六月十一日　金曜
大学及龍大休講。頭重シ。原稿カク。
午時、松本龍太郎氏来ル。イテヤ社ノ催促。

六月十二日　土曜
講義アル日ナレトモ休ム。
史学研究会例会。十二時島田氏ト会食。羽渓君後ニ来ル。一時半開会スル。聴衆五十名。牧健二、我国古代土地私有制度。羽渓了諦、仏陀時代ノ政治状態。五時過済、六時ヨリ研究室ニテ書物捜索。夜、改造社ノ平安朝ニ於ケル貨幣ノ使用及流通ヲカク。夜二時頃迄カク。一時頃筆ヨク運ブ。
岩波上原氏会ふ。史蹟ノ出版催促。

六月十三日　日曜
朝早起。原稿カキツヾク。
午前中ニ末マデカキ、午後序説カク。五時浜本浩氏来ル、催促ナリ。牧健二君四時ニ来リ浜本君ニ原稿渡サントス。二階ニテ休ミツヽ訂正ス。
七時浜本君再来。原稿マタ読マザルトコロアレトモ渡シテシマフ。何トモ致シカタナシ。是レモ一ノ訓練ナリ。牧氏ト話シツヽ食事ヲトル。夜早寝。

六月十四日　月曜
朝、京都史蹟報告ノコト、校正其他原稿ツクル。凡例ナドカキ直ス。時ニ似玉堂使来ル、渡ス。
午後、校正スル。橋川正君午後一時来ル。校正ヲ持ツテ来ル。
コレニテ夕方マデカヽル。少睡。
大阪積善館来ル。七時マデ談。小酒井君、植村君ノコト談ズ。星野改一ハ甥ナリト云フ話ニ大ニ奇トス。
ケフハ夏期講演ニツキ歴史地理同攻〔孜〕会下相談会アリ。八時頃ヨリユク。

六月十五日　火曜
【受信　大阪】
朝、又史蹟校正スルトコロ、似玉堂使来ル。少し校正渡ス。後又少しなし郵送スル。コレニテ全部終リタル訳ナリ。一時食後市ニ出ル。久シ振ニテ買物モアリタル故也。夏帽買ふ。洋服も買ふ。
夜、プロインッシエ・ヤールブックニ載ル、ランプレヒト論〔Franz Arens, “Karl Lamprecht” *Preußische Jahrbücher,* vol.203, 1926ヵ〕読ム。就寝十一時也。
午後一時過、小使大学ヨリ清原君学位論文送リ来ル。二冊受取。
梅雨晴れてあり、夏帽の新らしき。

六月十六日　水曜
【文化史。杉阪。大阪天満。平安美術。古代文化。史蹟発送。教育】

六月十八日　金曜
【高畠寛我奥様来ル】

六月十九日　土曜
【香取丸、高畠寛我氏ヨリ手紙】

六月二十日　日曜
【書状整理。
東京市外長崎村二一五三　塚本常雄。
熊木捨治　京大前古谷方】

六月二十一日　月曜
【元誓願寺小川東入　新興映画社　岡崎文夫】
朝、大阪ニ行ク。母を訪ぬる為也。中途稲荷神社ニよる。
大阪にて十全□□。天然寺ニ行ク。母も健在。
夜かへる。稲荷神社大雑踏。

【C/O Mrs F.Peter 27 Gloucester Cresent Regents Rark〔P〕】

六月二十二日　火曜
朝、住友銀行藤田襄氏来ル。矢野旅行信用状ノコトノ為メ也。

六月二十六日　土曜
【午後二時、伏見稲荷社神社研究会】

六月二十七日　日曜
【午後二時、楽友会館谷本博士還暦打合会】

六月二十八日　月曜
【英訳。府庁。電報。文化史】
【受信　江崎政忠　大阪談話会ノコト。七月三日マデニ決メルコト。杉山直蔵】

七月六日　火曜
朝、文化史執筆。
九時京都市役所より地堺定測ニ来ル。十一時半マデカヽル。大阪立川宇蔵氏来。昼飯。二時頃畑中氏来ル。四時頃まてあり。夕方、藤井幸永さん来る。写真の枠作ル。
夜、執筆少し。読書。西田、朝永著書。

七月十八日　日曜
六時起き、六時四十五分出でゝ七時三十七分汽車にて向日町に行き、本日の予定。
　北真経寺
　新神足村岡本家、勝龍寺城址
　調子家
に行く。北真経寺ノ霊宝を見る。日蓮日像遺像を注意して見る。十一時半出でゝ新神足村神足の岡本尹世氏家にては、岡本宣忠の自筆稿本を見たり。其多くの筆写本と共に自著の数あるを見て欣慕の望湧く。殊に筆蹟の丁寧なること故、内田〔銀蔵〕先生を思ひ出したり。自らの疎懶を深く戒む。岡本覚氏の家にても古本あり。島原一揆記貞享のものあり。権記ありたり。明治初年の此地方の地等〔ママ〕割等に関する記録あり。勝龍寺城趾は東西一町四十間、南北四十七間、五稜形なりとの標示あり。果して然るやを疑ふ。
調子家にては調子武正の像を月渓画くものあり。瑞泉寺史料あり。
同伴者、井川、塚本〔常雄〕、山根〔徳太郎〕君〔24入・国史〕。
夜、河守元伊勢の事につき亀井氏来る。十二時臥床。

七月十九日　月曜
朝六時三十分の汽車にて大阪に行き、大阪より箕面電鉄にて桜井に行く。此処は住宅地として近年の繁栄にかゝり、心地よき家多し。
武内文平氏宅にて八時半頃より三時頃まで居たり。其後其附近少しく散歩。
大阪に着けば五時也。加藤竹男氏ハ七時の湊町汽車にて津に帰る。余は五時二十分にて京都にかへり一浴後早く寝る。十時過。

七月二十日　火曜
朝、電話あり。新村先生なり。誤り木村氏と思ひ話合はず。大工宮本来ル。テーレース修覆。
午後、市役所。道路命名ノ会也。
四時過、古田〔良一〕、岩井〔武俊〕氏渡欧餞別品買ふため高島屋に行き扇子買ふ。大丸を見て帰る。
暑さ甚しく夜読書に適せず。日中数度夕立、されとふり足らず。

七月二十一日　水曜
朝、講習会準備。間もなく古田良一氏来る。
朝、坂口部長より電話あり。植村清之助君の事、身体、健康ノ事問ひ合はすべきやうの話あり。
古田君ノ為め送別会をする。電話を諸方にかける。昼餐を楽友会館にてする。参会、坂口、三浦二先生、富森、菅原、及予、主客六人。午後テニス大会一

寸見、後野球見る。関西大学と松山高等学校也。
夜、新村先生宅訪問。原勝郎先生遺稿ノことなり。
十二時臥。
哲学講座〔近代社1926.7〕来る。初めて也。あまりよき出来にあらず。私の読まんと欲したる講座は出て居ず。現代の哲学に関する部分少なし。哲学概論や哲学史の普遍なるもののみにて是もあっけなし。

七月二十二日　木曜
古田良一君、岩井武俊君、渡欧出帆の日なり。講演の準備もあれば見送らず。本日中に講演準備成し終らんとす。
荷物整理。

七月二十三日　金曜
大学研究室に行く。
夜遅くまで荷物つめる。一時を過きたるは見し。

七月二十四日　土曜
【講演　・序説、・文化史、・方法論　宗教　社会】
午前八時過ノ汽車にて出発。朝起くれは雨ふりあり。自動車を傭ひ二条駅に行く。時間余裕あり。松〔巌〕尾医学部教授に列車中にて逢ふ。汽車中にて読書。福知山辺にて少睡。八時半頃大社駅着。今市のりかへにて石谷辰次郎氏〔広島高等師範学校教諭〕に逢ふ。宿、本須谷、本〔ホン〕大和屋と云ふ宿なり。夜十二時過まで読書。

七月二十五日　日曜
午前八時半より講演。午後小憩。三時頃石谷氏講演を一寸聞く。廣〔昊〕瀬氏案内にて熊谷一□〔徳〕斎〔儒学者〕墓に参る。道にて加藤清正ノ祈願文を有する家を訪ふ。偽物也。手銭白三郎氏宅訪ふ。梁川星巌軸、佐久間象山軸。佐久間象山軸は望遠鏡のことを記せるものにして大軸也。面白きもの也。
夜、石谷氏と話しす。

七月二十六日　月曜
午前八時半講演。トーテミズム、生ノ考、自然観。
午後少憩。石谷氏来礼。夜遅く読書。

七月二十七日　火曜
八時講演。庭園、生死観、貨幣、諸論。
道子朝来る。午後少憩、町見物、後大社参拝。幣帛料五円。
夜、岩井龍海、鈴木敏也二氏〔ともに広島高等師範学校教授〕着、談話。海岸散歩。龍大ノ〈　　〉氏に逢ふ。乗光寺ノ子弟也。翌日古墳見に行くことを約す。

七月二十八日　水曜
朝早く出発。今市より知井宮駅に行き、装飾古墳を見る。
学校にても発掘品見る。それより天平の文字ありと近時伝へられたる古墳に行く。こゝも水つきてありしも、よく見るを得。天平の文字は怪しけれど、其壁画は古拙にして古きものなるべし。
玉造温泉に向ふ。玉造は湯町駅に下車。吉岡教員の案内にて琉璃の湯。

七月二十九日　木曜
朝、玉造神社参拝。午後暑し。夜暴風。

七月三十日　金曜
午前六時ノ汽車にのるため早起。自動車故障の為め、汽車をはづし十一時根雨駅。午後講演。此辺涼し。
夜、近藤氏等と共に涼を納れ又幻灯をなす。

七月三十一日　土曜
講演。十二時までなす。午後、榎の〈長楽〉寺に行く。長谷部信連ノ隠栖地あり。長谷部氏あり。この町は京都をまねびたりと云ひ、加茂、加茂川、祇園、延暦寺等の名あり。長谷部信連、京都の状

を写したるなりとの伝説あり。

八月一日　日曜
根雨出発。米子来。皆生温泉に至る。四時頃発。上井より乗換、倉吉に出で八時自動車にて関金温泉に至る。冷気。

八月二日　月曜
関金滞在。

八月三日　火曜
関金出発、十二時。一時ノ汽車にて京都に向ふ。夜十時半着。

八月四日　水曜
大学に行く。尾道講演及松山講演準備。午後八時頃帰宅。読書。夜一時頃臥床。

八月五日　木曜
朝、読書。十二時出でゝ一時ノ汽車にて尾道に向ふ。九時半着。商業会議所楼上講演室に至る。中村直勝君の後醍醐天皇論ある最中なり。
夜、村田四郎氏別邸にて宿す。

八月六日　金曜
朝、魚釣り。昼。四時頃〈浄土〉寺に至る。夜、講演。亡ひたる文明。講演二百名。

八月七日　土曜
朝、出発。尾道より大三島に至り八時〔午後〕過高浜着。九時過道後、鮒屋に至る。御手洗〔学・松山中学校校長ヵ〕、天野、西園寺〔源透〕〔伊予史談会〕、景浦〔直孝〕〔伊予史談会〕、藤田、諸氏挨拶。
一浴。霊の湯。

八月八日　日曜
朝、早起。開会式なりとて皆行く。暑き頃とて面倒なり。陳列品見る。松山町ノ図、宇和島ノ町ノ図。これは見たし。六合〔行〕社舎のこと明教館のこと調べたく思ふ。午後、帰宿。夜、雑談。

八月九日　月曜
【晴】
朝、早起。心地よからす。午後、城山見物。東雲神社。城山保存よきこと。東雲神社には能の衣裳あり。珍らしく美しき上、揃ひあり。夜、招待会。テーブルスピーチ。コーブルヒ城ニ似ること話す。史蹟保存のこと話す。十時かへる。

八月十日　火曜　　晴　あつし
【一寸珍らしく暑し】
朝起き気持ち悪し。下痢す。未だ暗き内に起きたるにより、睡眠不足と腹工合の悪しきには弱る。講演する前なるに一寸困る。仁丹のみて行く。
講演、黒正〔巌〕氏十時半まで話す。其後をうけて十二時半まで話す。午後、小酒井〔儀三〕、那波〔利貞〕氏ノ談話あり。一行中、中村〔直勝〕、島田〔貞彦〕、魚澄〔惣五郎〕、小酒井、菅原〔憲〕五人は此夜、尾道行の汽船に乗り、尾道より夜行にてかへらんと云ふ。予は尾道に行くは全く同じ道をたどることとて好まず、一夜泊まりて帰らんとす。図書館・明教館に行く。聖像、明教館額、松山藩学校蔵書は見るへきもの也。
夜、藤田、景浦、大浦氏来る。藤田元春君小言を言ふ。県当局より挨拶なきことを言ふ。夜臥床遅し。

八月十一日　水曜
夜起き湯に行く。腹工合よくなる。
松山八時半出発。北条迄自動車、道七曲をとほる。此辺の松原もよろし。北条の駅より少し手前を自動車にて走らすに、海中に美しき島見ゆ。駅にてきけば、鹿（カ）島なりと云ふ。島中に春日神を祀り、鹿を放てり。三十分の時間を利用してその海岸まで行く。島は狭き瀬戸を夾みてあり。海水澄み流れあり。清冷言はん方なし。

懸賞募集の名景の随一に当選したる由のビラ下りありて、茶店には多くの人涼み居たり。渡し銭五銭。時間なければ渡らず。絵葉書やありしも売れつくしてなし。
北条十時過発、高松に向ふ。川の江にて那波氏と別る。高松より宇野連絡船に乗る。岡山を経て午後十一時かへる。
帰宅せば、吉田脇田夫人宿泊。

八月十二日　木曜
休息。夜、大阪にかへる。電話かゝる。
留守中、牧氏来る。

八月十三日　金曜
大阪。暑さ酷し。塔婆書く。夜九時大阪宅出で京都にかへる。十一時過。

八月十四日　土曜
大学に行く。井川氏と共に乙訓郡史相談会のことの為め也。渡辺〔政太郎〕、畑中〔喜一〕〔ともに乙訓郡誌編纂委員〕氏来り昼飯、二時頃かへり。
其より谷井氏手紙かく。橋川氏はかきかく。
夜九時大阪にかへる。

八月十五日　日曜
大阪。塔。暑さ酷し。最高温度也。

八月十六日　月曜
大阪。

八月十七日　火曜
大阪施餓鬼会。

八月十八日　水曜
大阪。午後、和尚と共に甲陽園に行く。かへりて北港に行き更に北浜の支那料理に行く。十一時帰る。

八月十九日　木曜
大阪。午後九時出でゝ京都に来る。

八月二十日　金曜
【晴】
京都。朝、菅原君来る。やがて谷井済一氏来。昼、原敢二郎氏〔海軍少将（のち中将）・原勝郎実弟〕招待会。狩野、西田幾、東枝、矢野、菅原、浜田、原好二郎、予。四時半まて談話。
ことも博覧会最終日なれば記念館見る。他の会場は実ニつまらぬものにて、大阪毎日新聞もかゝる催しの下に新聞を利用し宣伝して人を集めるはよき事にあらず。四国外行中、四国版を見るに、地方人を吸収するため如何にも挑発的な宣伝をしてゐるを見、いよ〳〵いやになったが、この会場を見るに及んで大毎の行動を陋とする念生ず。

八月二十一日　土曜
七月二十二日已来ノ日記を追記す。夜、冷気。

八月二十二日　日曜
午後、小田原木全多見氏〔陸軍少将・大西祝実兄〕来。夜より発熱。朝、和田不二男氏来る。頭痛あり。

八月二十三日　月曜
臥床。頭痛あり。

八月二十七日　金曜
今日まて臥床。

八月二十八日　土曜
夜、和田氏訪門〔問〕。

八月三十日　月曜
午前、大学にて比叡山ノこと調へる。
電話にて光明正道〔京都市土木局〕君と談話。然るところ両方より同時にかけて異常線にて互に待合はす。

誠に偶然と言ふべきである。
午後、四条河原町角の地蔵尊発見のところに行き、地蔵尊もらひ帰る。陳列館中庭にならべた。都合十七体あり。提灯、花瓶、蝋燭立などありて中庭にたてゝ祀る。自動車にてかへる。夜遅くまで叡山のこと調査。

八月三十一日　火曜
叡山のこと。

九月一日　水曜
【朝、叡山ノコト】
大学に十二時半行き一寸調物。叡山、震災講演。夜。

九月三日　金曜
【尾道市久保小学校、妹尾茂吉氏来状趣、講演感謝。講演、小酒井氏ノ下ニ送ルコト】
夜、伊藤・池田二君来る。
手紙整理。
小橋浅雄君、見舞八月十三日、牛ヶ首日蓮上人石像ハガキ。

九月四日　土曜
【夜、試験答案】
【受信　八月二十二日発。宮地三保松〔ママ〕（尾道市土堂町。要件、梅颸女史筆山口景徳ノ文判読ヲ乞フコト】
大学研究室。喜田先生。朝、早起。望月〔信成〕君論文和田氏まで送届く。午後帰宅。

九月五日　日曜
【試験答案一日かゝる。植田寿蔵君巴里ヨリ手紙】
【受信　青木正児移転。仙台片平神宮東裏】
朝、和田博物館主事来宅。望月君のことにつき。
試験答案調ぶ。夜までかゝる。国史大分終る。
夜、智永千字文、買ひに行く。店閉じあり。鳩居堂にてノート及紙製盆買ひ来る。
夜、尚ほ用事。答案調ぶ。

九月六日　月曜
【朝、文化史。午後、大坂。夜、史研。／長寿吉教授来状、九月一日発、史研大会演説不取敢承知ノコト】
【受信　小林吉次郎〔天王寺中学1904卒〕（心斎橋二丁め一七八、同窓会ノこと）。山根徳太郎見舞】
書斎等整理し読書し易きやうにする。今日ノ朝ハ文化史続稿かゝんとしたれとも、かくノ如く書室乱雑にして整理に時をつひやして遂に筆をとらず。午後少憩。其より大坂天満宮ノこと調査。大分進む。夜、大学に行き史研究法ノ答案をとりに行く。帰途矢野による。スモーキングを借りる。雨少しふりむしあつし。帰宅後、史研答案二十人分調ふ。十二時臥。

九月七日　火曜
【朝、答案ー終ルツモリ。川上多助氏研究室来室。水野鵲之助氏考古学室にて会ふ。夜、答案調。清原貞雄氏来書、十七日頃来らん云々。夜、名刺注文】
朝、大学研究室に行く。研究室の椅子卓等掃除す。椅子ハ箒〔掃〕除せざる為め服の後部を穢し白き服に色をつけたれば、本日石鹸にて拭ふ。むしあつき日にて汗大に出てたり。されど拭掃除して心地よくなる。
部長室にて部長に会ひに行く。談話中。室に帰りて答案調査。三四名分終りて又部長に会ひに行きたれとも又他人と談話中。昼餐のとき会ひ、其後三春出張のこと依頼。後喜田先生とも相談決定する。九日夜出発とする。沢村君と共に瑞典皇太子歓迎のこと話す。考古学室にて。

九月八日　水曜
【夜、同攻〔攷〕会編輯会。楽友館／スモキング誂。丸善。靴】

九月九日　木曜
朝、研究室。午後、大丸。旅行部及洋服部かりぬい。
夜九時三十分発福島県三春町ニ向フ。

九月十日　金曜
朝、東京着。上野にて博物館見物。一時の急行にて郡山に向ふ。この夜、岩代熱海に泊る。温泉宿にて一力ホテルと云へり。夜つき提灯の光をたよりに駅より三四丁の田の道を行く。前山に電灯の光、山を登れるあり。聞けは猪苗代湖より水を引ける水力電気なりと云ふ。
湯は温度低くして之をあたゝめて浴せしむ。清澄なり。食物等よろしからず。室は誠に気もちよく瀬々の音を聞く、夏を忘る。泊料三円五十銭。

九月十一日　土曜
【晴】
三春町に向ふ。郡山駅前の布袋屋と云ふ洋館仕立の宿にて喜田博士と会ふ。
三春、川北旅館につき三春町役場に行く。

九月十二日　日曜
三春町にあり。
昼後、〔真〕常照寺。不動像、大日堂。
夜、天沢寺見に行く。阿弥陀像。鎌倉時代。小像。
夜、宿ニ結婚式あり。

九月十三日　月曜
午前、町役場。午後、学校にて職員クラブの茶話会。喜田博士及予、談話す。
三春町の家を撮影に行く。〔浪〕波岡氏ノ家をうつす。
喜田博士、本日出発帰仙。

九月十四日　火曜
午前、町役場、宿にてうつし物をする。秋田東次郎氏来り、うつしもの捗らず。午前十一時三十分出発のところを延ばす。午後二時前自動車にて郡山に向ふ。二時三十七分の汽車をとらへ上野九時半、東京十時半にて京都十時半着。上野駅電灯消えて暗黒。

九月十五日　水曜
大学に行く。部長に逢ふ。
瑞典皇太子歓迎のこと浜田教授と談す。

九月十八日　土曜
【内藤博士東洋史第二集論集発行。今〔龍〕西、沢村、西田、藤田、神田。十一月二十日締切】
大原に行く。三千院及寂光院。五時帰宅。清原貞雄君来。

九月十九日　日曜
【山下諒一来信】
読書。夜、三条江戸前にて清原君と会食。

九月二十一日　火曜
【発信　浜田教授よりの来信により式部職へ旅費のこと〔ママ〕依任状送る。田端貞信〔式部職属〕】

九月二十二日　水曜
【教授会】

九月二十四日　金曜　　晴
瑞典皇太子、午前八時京都着。停車場出迎。モーニング着用。大学より自動車出すことになる。けふは自分にて自動車やとひ行く。時間早くして、八時になる為さきに行く。
大宮御所着。後、博物館。大宮御所昼食。午後三十三間堂、石山寺。

九月二十五日　土曜
【二十五日迄に共同資金ノ購入ノコト。午後二時、小野鐘山硯石講演。美術倶楽部】

午前八時、大宮御所。桃山参陵、我等行かず。十時頃御帰着。十時過より御所、二条離宮。十二時着。昼餐陪食。午後一時半出門。山中商店に行き六兵衛に行き、其より醍醐寺、法界寺、更に宇治に行く。此日、妃殿下は宇治高谷別荘にて茶席あり。又茶摘を御覧に入れたり。宇治平等院にて両殿下御落合ふことになる。この時已に暮色いたり蝋燭を以て堂内を見る。八時頃かへる。

九月二十六日　日曜
朝、桂離宮。嵐山より桂に向ふ。此日妃殿下は保津川下りなり。桂離宮より博物館に行かる。午後、太秦寺、天塚、金閣寺、其より我等は大学にかへる。殿下は川島甚兵衛に行かる。大学にて茶(テー)あり。我等は別室にて茶をのむ。大学かへり日暮る。

九月二十七日　月曜
朝、大原三千院。其より大宮へ。我等は途中列とはなれて帰り旅装をして停車場に行、殿下は本願寺拝観。奈良着。御散歩あり。夜、予定をつくる。

九月二十八日　火曜
朝、大仏殿、正倉院。
午後、正倉院、仮庫。帰へり道、春日社、鐘楼。
夜、談話あり。

九月二十九日　水曜
朝、三月堂、正倉院。
午後、正倉院。

九月三十日　木曜
朝、正倉院。
十一時頃より法隆寺、小雨あり。昼餐、法隆寺、中宮寺。
夜、招待会。狂言。うつほ猿、夷大黒。

十月一日　金曜
薬師寺、唐招提寺、法華寺、博物館、新薬師寺、頭塔。

十月二日　土曜
奈良出発、大阪。
大阪泊り無。住友に行きかへる。

十月四日　月曜
【朝、府庁藤田氏より府下史蹟の表彰方についての予算の参考なるべき個所を問合あり】

十月五日　火曜
住友、毎日新聞。水野鷸之助。

十月六日　水曜
夜、史学同攻〔孜〕会。

十月七日　木曜
夜、粟野秀穂君来る。

十月八日　金曜
朝、午前、雑用をなし、午後、龍谷大学。史学概説は話しをなし講読をなすことを告ぐ。国史は自然愛、仏教の影響、梁塵秘抄。
夜、内藤先生宅。山東君より依頼のこと及史学研究会講演のこと依頼。共に多忙にてなし難き由返事。
夜、読書。夕方、河守亀井氏来。

十月九日　土曜
【午前、午後、宅。
○亀井氏借用文書返スコト
○伊地知氏ノコト同様
○黒板〔勝美〕博士ニ逢フコト
○府庁ニ行クコト
○島田氏ノコト
○杉野君用事、フロシキ返スコト】
午前、府庁、予算のこと。午後、大学に行く。夜、

肥後・山根・池田来る。金曜会のことにつきて中村君の云ふことにつき相談に来る。

十月十日　日曜
夜、狩野博士来る。亀井氏来る。記録かへす。

十月十一日　月曜
午前、在宅。午後、市役所道路名つける協議会。夜、藤田楼黒板博士に電話かける。読書。

十月十二日　火曜
【晴】
朝、在宅。十時過学校。宮内省和田軍一君来る。昼飯。午後、大学研究室。教官室に行き談話。榊〔亮三郎〕先生に高畠君のこと依頼す。前田聴端氏研究室に来る。渡欧挨拶の為也。逢はず。研究室に居らず。夜、木島〔誠三〕君〔24入・国史〕来る。論文特殊講義受取る。十二時臥床。

十月十三日　水曜
朝、平田隆三氏来る。区画整理のこと也。後又、山田賀一君来る。同じ事につき。
演習。十時より少し後る。十二時五十分まで行ふ。土井氏。
昼飯なし。教授会。図書委員会。武内氏論文。
夜、金曜会。後藤基次君満業談あり。十三名。

十一月七日　日曜
午前、早起。史学研究会大会の離宮拝観の日なり。九時、二条離宮着。拝観会員七十九名。猪熊浅麿〔麻呂〕氏説明。

十一月八日　月曜
朝、岡崎君、教授方を訪問。余は読書せんとしたれども、連日の繁劇に疲労あり。それでも尚ほラウムの神聖貨幣〔Bernhard.Laum, *Heiliges Geld: eine historische Untersuchung über den sakralen Ursprung des Geldes*, Tübingen, 1924〕、汐見〔三郎〕助教授より借りたるものを読む。夜、金曜会あり。原随円〔園〕君来会。岡崎文夫君十時頃来る。中原与茂九郎氏〔西洋史25卒〕参会。坂出の□〔郷〕土図書館の主事たるものを欲する由言はる。

十一月九日　火曜
【晴天にして稀なる天気也】
午前、少し遅く起く。岡崎と共に八瀬まで行く。途中赤山の紅葉を見る。見頃なり。八瀬にて平野家支店にて芋ぼうを食しかへる。夜。
勝峯月渓君〔国史24卒〕来る。大学研究室に入りたしと云ふ。

十一月十日　水曜
【雨】
朝、大学、演習。佐藤〔虎雄・24入・国史ヵ〕、塚田〔忠泰〕〔24入・国史〕、報告。次回岸本〔準二〕〔24入・国史〕、肥後〔和男〕。大学食堂。
午後、室のことにつき三浦先生と談合す。
夜、疲労、独乙語講読の書を少し読む。
本日早朝、小橋浅雄君来る。和歌山師範に三浦教授より推薦せられたるにつき相談。行くを好まざる為め也。
大学にて、読史会大会は明治維新時代の陳列とその講演をする由、松野君より三浦先生の言伝あり。後、三浦先生亦これを言ふ。明治時代今世人興味を惹く為め也。不相変きわものを覗ふ心ぞうたてし。

十一月十一日　木曜
【晴】
朝九時、大学に行く。
暹羅ダンニー殿下、文部大臣〔岡田良平〕、大学に御越しにつき、接待として席に列す。半時間ほど総長室の隣の室にて談話あり。席にあるもの、総長〔荒木寅三郎〕、坂口部長、松本、小西、新村、浜田、及山本美越及教授なり。山本教授を側によせて京都大学の社会主義的傾向につき問はれたり。大学生が如何なる種類の社会

主義を奉ずるや。山本教授は種々の主義ありと。然らば其れを奉ずる心理如何。山本教授は之は主として模倣にあり、大なる危険性なしと。後、中島〔玉吉〕、河田〔嗣郎〕教授の授業参観。其後、陳列館貴賓室にて南方諸国及暹羅に関する史料等を覧る。陳列するもの、日暹関係資料、日本人町ノ図、山田長政、天竺徳兵衛漂流記、ケンペル及カロンの著作、暹羅への朱印状、亀井茲矩のもの、及暹漢文の書牘1605のもの等なり。
午後、大阪山中商会の陳列に行く。支那、暹羅、波斯、希、埃等の金石の陳列なり。其就、支那、健陀羅の仏像等には面白きものあり。其目録写真版あるものを貰ふ。

十一月十二日　金曜
【晴】
午前六時半起床。大学、史研、国史普通講義。午後、龍大、四時半まで。多忙にて凡て予習の暇を得ず。前月来の用務連続、休むときなし。夜、大学図書館に書籍を借りに行く。

十一月十三日　土曜
【晴、夜雨。新見吉治氏〔広島高等師範学校教授〕手紙来る。史大会の礼状なり】
本日、特殊講義及現代史学講読休講す。前月来の多忙全く極度に達し、書斎裡乱紛言ふべきなし。少しく疲労を医する為め在宅し、脳裏整理せんとす。日記の整理をなす。

十一月二十日　土曜
【好田政孝－扁桃腺、病院、北久太郎町一丁め】

十一月二十一日　日曜
【今村隆　日本橋区通四ノ五】

十一月二十九日　月曜
【和田軍一君】

十二月四日　土曜
【来年大会には、四□□□〔甸服ヵ〕ノ□□□〔天皇親ヵ〕東天子西天□〔慮ヵ〕ノコト。龍車－電車道ノコト】
読史会大会。明治時代ニ関スル陳列と講演をすることになった。
　明治史の暗黒面（三浦）
　明治初年の諷刺画（西田）
　明治の国体擁護運動（藤井〔甚太郎〕）
　明治風俗界の破瀾〔波〕（江馬〔務〕）
　明治の民事裁判（牧健二）
夜分は談話会あり。黒正教授、天沼〔俊一〕教授も参会。かん想談にて学生中。予は史学者の領域近時狭めらる、史学隆盛なれども歴史学科の領分少なくなることを云ひ、これは如何に観らるべきやとの談をなす。

十二月五日　日曜
鞍馬山に行く。少し散歩せんとしたるに、つひに鞍馬山まで行きたり。帰途山より二軒茶屋まで自動車にのりて帰る。

十二月六日　月曜
登学。朝早起。心地よし。午後、研究室。借用ノ諷刺画調ぶ。異状なし。

十二月七日　火曜
早起。学校に行く。食堂。手紙かく。午後、大坂天満宮のこと調ぶ。

十二月八日　水曜
早起。演習。午後、史学科打合会なり。

十二月九日　木曜
終日在宅。講義の準備。この日、三四種の講義準備も楽に出来、略々今後の組織立つ。
夕食後、散歩。心地よく早めに臥床。早めに臥床

することにより、この頃心地よく仕事も捗るやうなり。早く寝ね早く起きたきものと思ふ。早寝すれば朝おきたるとき爽快にて仕事の気分をおこす。今迄になき経験を得たるやうに思ふも、我ながらおかしく考へらる。

十二月十日　金曜

講義。

　史学概説　史学の考察。

　国史　個性のこと　足利時代。

　龍大　史学　古文書学、紋章学。

　　国史　銅鐸、銅剣、銅鉾のこと。

夜、研究室。書物持かへる。

講義二科目の原稿かくは頭を混乱さすものであると思ふ。以後これはやめたきものである。来学年講義のこと種々工夫する。昼間の八時間は本日は疲労の気味もなし。夜遅くなり此間より早寝早起の風この日乱れかゝる。

十二月十一日　土曜

【ガーロックパッキング　川端丸太町下ル　鵜飼猛男　進藤林業会社　上四二四四】

朝、講義。

特殊講義には、宝暦の社会不安、河内狭山、彦根の騒動等を話し、天明の打壊し等を論じた。宝暦雑録、天明大政録、森山孝盛日記、正宝録。

現代史学、ゲオルグ〔Georg von Below〕フォンベローのトライチケ〔Treitschke〕崇拝ノ条読む。美術史研究室にて日本彫刻のこと調ふ。

午後五時頃帰宅。

夜、金曜会。十五名ほどあり。藤井甚太郎君、加藤仁平君、談話。加藤君は和魂漢才説、藤井甚太郎氏は虎の門事件の記録を持来る。十一時半過閉会。

深夜、翌午前一時、高島屋焼く。

十二月十二日　日曜

【秋田市長野下堀反町一一　小林別館　津田和一】

在宅。少しゆるやかに日曜を過さんと思ひ本日は在宅とする。心静かに読書せんとす。日曜日は休養の日なれども、近頃の我には心静かに読書すること唯一の慰安なり。スタインベルク〔Steinberg〕の書読む。

午後四時頃、彫刻のこと覧る。夜、市原氏宅、仏像彫刻の話をする。市役所の富田氏、梅溪〔通虎〕子爵あり。

十二月十三日　月曜　　晴天

市役所にて町名選定の会あり。午後一時半より五時迄かゝる。けふ各員そろふまでに、山本臨乗氏・猪熊浅麿〔麻呂〕氏談話に、京都府の史蹟として面白いことは、洛中洛外の立石、一は梅逕校、一は室町校にあることを聞く。市内の古井のことにつきてハ、重の井のことも注意したしと思ふ。それについての考証は山本氏所有すると云ふ話なり。見たきものなり。

十二月十四日　火曜　　晴

本日も午後市役所にて町名の打合会あり。本日を以て終了する。町名の選定にて、昨日は土居の為めに西土居町をつくり、六条通を復活する。その他、壬生車庫前の斜につける町通は、初めハ永昌通の町名を原案者よりつけたれども、美名であり古名を却って乱〔ママ〕だすとの意見出で、種々討論の結果、遂に其の附近の地は後院のありたるところなればとて、後院町〔通〕の名にきまる。京都市役所には字名をかける京都の地図あり。

十二月十五日　水曜

午前、大学研究室に行く。演習はなき日なり。会食日。午後〇時四十五分より史学科の打合会をなす。これは前週の打合会に於て、喜田先生の隔年に講義を願ふ件につき小生ハその隔年にすることは良しからざるを力説したるを以て、部長は喜田・藤井〔甚太郎〕両講師とも継続して講義を願ふことにし、たゞ其の支給額を少し減じて新講師招聘にあてんことを考へたれば、これにつき打合せんと云ふなり。

史学科よりハ内藤先生、又東大の原田〔淑人〕助教授を新講師として招聘さることとし、喜田・藤井二講師

の支給額及時間を少減するを決す。
一時過より教授会あり。席上論文審査員（卒業論文の）決定。〔16日に続く〕

十二月十六日　木曜
〔15日より続き〕教授会、問題は、
仏教学講座担任者として羽渓氏推薦、助教授のこと。
榊教授より反対の意見あり。
社会学に於てハ五十〔信〕嵐氏推薦、藤井講師よりの件。
宗教学にては山谷省吾氏推薦、波多野教授より。
史学・考古学にてハ原田助教授、浜田教授より。
喜田教授の件、坂口部長。内藤講師の件、矢野教授、質問出でたり。
文学科独文。

十二月十七日　金曜
午前、早起。八時過大学。普通講義。史学概論。国史概説。国史は明治時代の個性のことを述べ終りとす。午後、在研究室。特殊講義準備。
夜、楽友会館にて夕食。辻善之助博士食堂にありて話しながら食事する。小〔茂〕松君に談話室にてあふ。

十二月十八日　土曜
【天気寒くして風強し。午後ハ雪を降らす。夜になりて積り白し】
午前、早起。講義準備を少しなして、九時半家を出でゝ登学。本日を以て講義の終りとせんとす。但し廿二日の水曜ハ私の演習あれども、歳末にもあり、聖上の御不例にてもあり、行はれ難からんものと思ふ。
特殊講義には士分の思想、風俗の意味等を話し、「現代の史学」にてハ、スタインベルグ〔Sigfrid Steinberg,ed., *Die Geschichtswissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, Leipzig, 1925〕を読む。けふはゲオルグ・フォン・ベローがラムプレヒトに対する感情を吐ける条、一頁半を読み終る。
午前十時頃号外あり。聖上御不例にて御大切の御容態と云ふ報あり。夕刻にてハ午後御容態衰弱相加はる由の記事あり。

十二月二十四日　金曜
夜、天皇陛下御重篤ノ号外。

十二月二十五日　土曜
午前四時前、新聞社より電話あり。驚き起き出いれバ聖上崩御の由、今より私宅に行くべしとの事なり。答ふる言葉もなし。一時間後に来られたしと云ひて起き出で、御灯などとぼし二階客間に法然上人御影をかゝげて香をたく。火をおこし室を清めする。けふは寒きこと甚しく、窓外を見れば白雪をつむこと一尺五寸。寒風の音はきこえねど、寒冷身をさすばかりなり。
朝食。新聞社員来らず。十一時昼食。大学に行き聖上宸影を拝す。午後、清原貞雄君来る。星野店主来る。清原君ニ教科書のこと依頼のため也。午後四時過、時事新報の高橋君来る。

十二月二十八日　火曜
御用おさめ。午前、学校に行く。

十二月三十一日　金曜
大晦日なれども読書する。原稿かく。夜、池田源太君来る。

当用日記補遺
【十四年】
日本文化史、史学雑誌原稿、内藤博士記念論文、イデア社論著、岩波書肆、京都府庁、岡山県、第一高女